

聖典
泰山教學講授錄
(初門の編)
下卷

特261

428



始



附26
42

教祖
加藤泰山講述

聖典泰山教學講授錄 下編

初門の巻

會津
若松

大日本哲學院藏版





術施式座圖四第



第一圖 立式態度



法修觸不圖五第




第二圖 座式態度



第六圖 對座修法



第三圖 立式施術



 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院


 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院

 日本書道院





者術受隔遠 圖八第



者術施隔遠 圖七第



術感靈器陶 圖九第

目次並ニ索引(下編)

○第十三講 靈力顯現活用篇の一

秘法

第一章 靈學療法

第一節 他人治療法

第二節 直接治療法：宇宙の絶大無限の偉力

第三節 心身の準備

一、立式療法 二、座式療法

第四節 患者の態度

第二章 各種病癆治療の實際

第一類 精神病、腦充血、腦溢血、腦病、腦膜炎、頭痛、眩暈、肩凝、神經衰弱、ヒステリー、不眠症治療法

第二類 眼病、眼痛、ノソコヒ、トラホーム、ノボセ目、角膜炎、網膜、ホシ目、其他眼病及涙腺病治療法

第三類 鼻の病、肥厚性鼻炎、鼻加答兒、鼻出血、鼻炎、蓄膿症、赤鼻、其他鼻に關する病治療法

第四類 耳の病、中耳炎、耳鳴、耳ダレ、耳痛、聾、其他耳に關する病及び啞治療法

第五類 口中の病、口内炎、舌の病、齒痛、齒齦病、ムシ齒、其他口腔に關する病治療法

第六類 咽喉病、扁桃腺炎、氣管支炎、レイレキ、其他咽喉に關する病治療法

第七類 肺病、肺炎、肋膜炎、胸膜炎、痰、咳、百日咳、喘息、感冒、流行性感胃、食道狹窄、乳腫、乳汁不足治療法

第八類 心臟病、肝臓病、腎臓病、萎縮腎、糖尿病、膽石病、黄疽、丹毒症治療法

第九類 胃癌、胃痛、胃癌、胃加答兒、胃酸過多症、胃酸過少症、胃潰瘍、胃アトニー、胃擴張、胃下垂症、癒、治療法

第十類 腹膜炎、腹膜炎腫、盲腸炎、腹痛、腸加答兒、便秘、下痢、腸空扶斯、其他腸の病、脱腸、癒疹治療法

第十一類 疝氣、膀胱炎、睾丸炎、淋病、消渴、肛門周圍炎、痔疾、脱肛、梅毒治療法

第十二類 卵巣病、子宮内膜炎、其他子宮諸病、月經不順、月經閉止、月經痛、血の道、性慾不能、冷性、治療法

第十三類 動脈硬化症、血壓亢進症、中風症、不隨症治療法

第十四類 脊髄諸病、筋内ロイマチス、關節ロイマチス、筋肉炎、關節炎、骨膜炎治療法

第十五類 神經痛、顔面、肋間、腰骨、手、足其他神經痛治療法

第十六類 脚氣、産脚氣、壞血症、麻痺症、痲痺治療法

第十七類 皮膚病、田虫、疥癬、濕疹、シラクモ、ナマツ、其他皮膚病治療法

第十八類 面癩、諸種の腫物、吹出物、恙虫蝨毒、蝨毒、疥虫、胎毒治療法

第十九類 火傷、凍傷、擦傷、打撲裂傷、切傷、打撲痛、挫き等治療法

第二十類 ソコ豆、疣、痣治療法

第二十一類 吃音、寢小便、寢言、齒ギリ、夜泣癖等治療法

第二十二類 離産癖、恐迫觀念、赤面癖、喫煙癖、飲酒癖、遊蕩癖治療法

第二十三類 記憶力減耗、精力減退、病名不明の病治療法、陣痛即癒無痛分娩法、しやくり即治法

第三章 修法の實際

第一節 思念について

第二節 思念についての注意

第三節 接觸修法

第四節 不觸修法

第五節 乳兒治療について

第六節 靈手病を知る

第七節 病氣の靈覺

第八節 病處靈眼に映す

第九節 邪靈憑依の事

第四章 治療修法上の注意事項

第一節 治療上の注意事項

一、服装の事 二、淨手の事 三、雜念消滅の事 四、禁慾の事 五、催睡の事 六、雜病劇症に當面したる場合について

第二節 感應について

慢性病患者治療について

患者への注意：病毒の分解：靈力は全身に作能す：心肉共濟

施術期間について

監施を戒しむ

第六節 座式施術について

第七節 緣なき衆生度し難し：生因緣濟度：無生因緣難濟度

○第十四講 靈力顯現活用篇の二

秘法

第一章 遠隔治療法

- 第一節 遠隔治療法の實際…治療秘法
- 第二節 遠隔治療法の原理
- 第三節 靈感の時間
- 第四節 遠隔施術の實驗
- 第五節 施術後の靈感持續…施術後靈感持續の事…施術期間後著効の事
- 第六節 死生の靈覺

第二章 自己治療法…治療秘法

- 第一節 自己治療法の實際
- 第二節 如何なる難病痼疾も快癒す
- 第三節 疲勞即治法
- 第四節 即時安眠自由法
- 第五節 參考事項
- 第六節 輕症の如き重症
- 第七節 人の心は二様に動く

第三章 靈通法

- 第一節 神通力發顯法
- 第二節 靈通法の實際
- 第三節 大自由大自在秘法

第四節

大靈尊の照明
何千里にも分秒の差なし…これ程の眞實はなし

第五節

鈍感と敏感の辯

第六節

神通力即時顯現
不思議に非ず唯々玄妙

第四章 陶器靈感術

- 第一節 物質主義者の矛盾
- 第二節 物質主義者の崇敬は電子…電子以上の偉力の證明
- 第三節 陶器靈感術の實驗
- 第四節 電子崇拜の迷信を打破す
- 第五節 電氣療法は靈學療法に及ばず
- 第六節 教理と現實一致
- 第七節 靈力實證術

第五章 靈動法

- 第一節 靈動法の實驗
- 合掌靈動法
- 第二節 全身靈動
- 靈動按摩
- 第三節 左手靈動、右手靈動、立式靈動
- 精神と靈との別
- 第四節 呼吸式靈動と大差あり
- 第五節 朝起き自由法
- 第六節
- 第七節

第六章 靈示法（靈知法）

- 第一節 靈示法の實際・秘法
- 第二節 靈示は純眞正確
- 第三節 靈示法の別法式
- 第四節 靈覺法

第七章 禽獸蟲魚治療秘法

- 第一節 秘法可能の靈理
- 第二節 禽獸虫魚治療秘法の實際

第八章 樹木草莽治療秘法

- 第一節 樹木草莽治療秘法の實際

第九章 靈力體得後の注意

- 第一節 靈覺を減盡せよ
- 第二節 慢心を起す勿れ
- 第三節 進んで他を救へ

○第十五講 勤行篇

◎行法の態度

座式態度の由來：宇宙自然の相

◎毎朝の行事

- (一)感拜の行事 (二)悟信の行事 (三)感謝の行事 (四)本願顯現秘法 (五)懺悔滅罪秘法

(自一〇七七至一〇七七)

目次並に索引 終

◎毎夕の行事

- (一)感拜の行事 (二)感謝の行事 (三)本願顯現秘法 (四)懺悔滅罪秘法

◎食事の行事

- ◎皇室に對する敬法||皇室の尊嚴

- ◎大靈章の由來||卍字章の解||十字章の解

- ◎泰山教の本尊

- ◎餘錄

蚤、虱も殺すな||悟入後の罪惡は觀面に現はる

- 神體佛像に對する行法 ●墓地に對する行法 ●葬式の行法

外講 靈光認識：如來の佛光：僧とは何ぞや：菩薩の解

前 言

これまで講授いたしました。第一講から第十二講までは人々に御話しなすつてもよろしいが、これから親授するところの、諸秘法術は、私の許可なくしては、絶対に他人（家族と雖も）に洩らしたり、傳へたりすることは嚴禁いたします。私の許可なくしては靈法術の實施が出来ないものであります。

本講授録謹讀者に誥ぐ

入門して私の親授を受くる人々には、前言の如く、諸秘法術を他へ傳へることを嚴禁して置くのでありますから、諸賢に於ても同じく、上編、中編の二卷は構ひませんが、この下編だけは、他人に見せることを、絶対に嚴禁いたします。

泰山教學 初門の巻(下編)

泰山教祖 加藤泰山 親傳

第十三講 靈力顯現活用篇の一

秘法

第一章 靈學療法

第一節 他人治療法

他人の疾病を治療し、靈力を矯正するの秘法に二つありまして、その一つは、患者に對して、觀照を爲す直接治療法で、他の一つは、患者に直接せず、遠地に在る者に對して行ふところの遠隔治療法であります。

第二節 直接治療法

我が精神は健全なり、汝の精神は不健全なり、我れ今、汝の精神に活力を與へ、汝の精神を健全ならしむ。(本文)

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。(秘文)

〔本文の解釋〕

我が精神は健全なり

これは大我の精神を申すのであつて、即ち悟つた我の精神であります。即ち、宇宙大精神、宇宙大靈であります。

汝の精神は不健全なり

汝とは患者のことです、精神は不健全なりとは、患者の不健全なる精神を指すのであります。貴老幼男女の別なく、病氣や懸念は不健全なる精神の發現であります。故に汝の精神は不健全なりと申すのであります。

我れ今、汝の精神に活力を與へ

我れ今、の我れは、大我の我をいふのであり、汝の精神に活力を與へ、の活力は、宇宙の大活生命力、大靈の力であります。

汝の精神を健全ならしむ

とは、大靈の力を興へて汝の不健全なる精神を掃除して、健全なる精神にする。といふ意義であります。

〔秘文の解釋〕

泰山教は、唯て講義したるところによつて明らかなる如く、宇宙の眞理を闡明し、一切の事象の根元を瞭かにし、些の晦澁なく、純眞透徹したる教義であります。故にその教義を實行する、法及術におきましても亦頗る明瞭なることは申すまでもないことでもあります。従つて本教に於ける諸法に用ひる秘文は、或宗教の如く、殊更に不瞭にして、知らしめざらむとする如き解はなく、よくその意義を明瞭に説き、誰人にも理解せしむるのであります。然らば、この秘文は如何なる意義であるかと申せば、これは、私が今日まで皆さん方に講義いたしました泰山教の全精神の露つて居る言葉であります。

泰山教の全精神を表顯すべき言葉をわが國語の中に求めましたが、これにふさはしく目力のある言葉はないのであります。それで、英語を譯べましたところ、英語にも亦ないのであります。そこで、英語の訳語を譯べましたところ、適切な言葉があつたので、それに英語の一二を組合はせて、これで始めて、**泰山教の全精神を表顯すべき言葉を**得たのであります。それが即ちこの秘文なのであります。

この秘文の意義は

宇宙の絶大無限の偉力

といふのであります。宇宙の絶大無限の偉力……之即ち宇宙大靈の力であります。

第三節 心身の準備

直接治療法 この治療秘法を行ふに際して、その心身の準備から説明をいたします。

一、立式施法態度

先づ、口を漱ぎ、手を淨め、大我の精神を持し、身体は、立つて施法するときには、足は六十度の角度にし、膝を屈せざるやう直立して、兩手は兩股の外側へ垂直し、中指は内部に向け、他の四指は密接したるまゝ下に向けるか、又は中指を内にして握り、鼻と膝と肩とと相対せしめ、口は軽く結び、眼は閉ぢる。(巻頭寫眞第一圖参照)

二、座式施法態度

座して施法するときには、膝を折つて左の足裏の中程へ右の足の甲を乗せるか、又は重ねずして左右の中指の先を接觸して、その足裏のところへ尻を按じ、前趾、兩膝は開き、而して左手を下にし、右手を左手の掌の上へ置き、左右の中指を接觸して體形を作り、それを下腹部へ置き、鼻は膝と對せしめ、耳は肩に對せしめ口は軽く結び眼は閉ぢる。(巻頭寫眞第二圖参照)

然して、必ず治すといふ強き確信の下に(何病を治す)又は(何病を癒正す)と、思念して、前記の治法を行ふ。(數病あるときは、何病を治すと數病を同時に思念す)一回の治療時間は十分乃至十五分間とし、重き患者には長く、軽き患者には短くて宜

しい。思想は最初一回のみにて、その後は、治療時間中、右の治療秘法を行ふ。しかして、治療秘法は 本文一回に付秘文三回の割合に、大我の精神の中に叫ぶのであつて、それを、治療時間中、繰り返して行ふのであります。治療法の本文秘文とも、決して音唱するのではなく、口や舌や咽喉等を動かさず、大我の精神の中に叫ぶのであります。大我の精神の叫びは、大我の精神の力の發現となるのであります。大我の精神の力、即ち大霊の力であり、大我の精神の叫びは、忽ち大霊の力の發動となり、指頭、手掌、頸部、足部その他、實は全身より、滾々として無盡に顯現するのであります。何故、音唱せないか、何故、口を結び、眼を閉ぢるか。それは、口を開けば靈氣は濺りに外部へ放出されるからであり、眼を開けば、種々なる物が反映して、小我の精神に雜念等が起るからであります。しかして、この治療秘法の本文秘文を大我の精神の内に叫ぶ秘法の場合には、本文一遍秘文三遍（本文一遍秘文三遍を一回と申します）で十五秒位を長しとする。修練される中は、二十秒乃至二十五秒位かゝる人もあるが、急いで間違ふよりは、緩くりやつて間違はぬ方が宜しい。間違はねば緩くりやつても靈力は發現するのであります。

第四節 患者の態度

さて、術者についての事がお解りになりましたら、次には患者の態度についてお話をいたしましう。患者は座らせて瞑目合掌せしむる。座ることの出来ぬ患者には脚を伸ばさずとか、あぐらをかきとか、樂な態度を採らしめる。そして、術者は前述の立式の態度で患者の側面に立つて必ず治すといふ信念を持ち、何病を治すと思念して、左又は右の手を患者の頭上に軽く置き、（その手は五指を密接して平面とする）片手は垂直したるまゝにて、第一回（本文一遍秘文三遍）の治療秘法を行ひ、而して各患部（疾病の種類によつては患者を臥さしめ）に手をあて、治療秘法を行ふ。（巻頭真眞第三圖第

四圖参照）

註、加藤式靈學療法は既に説明いたしました通り、他の精神療法とは違ひ、對手の精神の如何を問はず、絕對偉大の大霊力の作用に依つて、一切の病癰を治癒せしむるのでありますから、隨つて患者の態度については何等の條件を附せず、患者の自由に任せ、良いのであります。で、私は、數年前迄は、患者に合掌もさせず、目もつぶらせず、患者には自由の態度をさせて居つたのであります。然し、凡夫の患者等は、この治療が、至上至尊の宇宙大霊の靈力の發現に依るものなる事を知らず、藥物その他何等の物質をも使用せずして、治療法を行ふを見て、彼の禁厭か祈禱の如きものゝやうに誤信し、驚く之を思惟するの傾向がある。それでも、治療の効果には何の支障もないが、患者が至上至尊の宇宙大霊の靈恵みに浴する事を覺らず、大霊の尊を輕視するが如きは、患者そのものが、大霊の尊に對し率り、不敬を爲すものであり、罪惡醜成の因となるのであるから、これを避けしめる慈愍心より瞑目合掌せしむることしたのであります。しかし、瞑目合掌は大人ばかりで子供などにはさせなくとも良いのであります。また、大人でも重態臥床の者であるとか、昏睡状態にある者、又は精神病者や、合掌し得ざるやうな不具者不自由者等には瞑目合掌せしむるの要はないのであります。

第二章 各種病癰治療の實際

第一類

精神病、腦充血、腦溢血、腦病、頭痛、眩暈、肩凝、神經衰弱、ヒステリー、癲癩、不眠症治療法

精神病 精神病患者を治療するには、先づ「必ず治す」との信念の内に「精神病を治し邪念を滅却す」と思念し、患者の頭上に軽く手掌を觸れ（又は手掌を置いただけでもよし）して、十五分乃至二十分間他人治療法を行ふのであります。しかし、精

精神病者は憂鬱狂でもあれば、チツとして居るが、躁狂患者などはチツとして座つてなど居りませんから、それ等は遠隔治療法を施して極すのであります。
醫學療法や精神療法では、精神病を治療することは不可能であります。わが醫學療法では精神病を全治せしめた實例は幾らもありません。

腦充血、腦溢血 腦充血や腦溢血症は頭部へのみ治療法を行ふてよろしい。起きることの出来ぬ患者は臥して居るまゝにて、その頭部又は手部を觸れて治療法を修すればよろしいのであります。

腦病、頭痛、眩暈 腦病、頭痛、眩暈等は何れも頭部のみへ十分乃至十五分間治療法を行へばよろしいのであります。

肩凝 肩の凝るのは、頭部へ五分間も治療し、それから患者の後へ廻り座式態度を取り、頸部へ左右兩食指を當て兩手掌を兩肩へ置いて十分間も治療すればよろしい。

神經衰弱 神經衰弱症は心臓、胃腸、生殖器等の各機能に障害を來して居るのがあり、また遺精、夢精等を伴ふものもあり、すから、初めよくそれを確めて、さうであれば、神經衰弱及びそれ等の症狀をも思念する。假令は、胃腸も思念したならば、「**神經衰弱及び胃腸病を治す**」と、思念して、初め頭部へ十分間治療法を施し、次に仰臥せしめて胃腸部に十分間ほど治療する。もし神經衰弱症だけで他の症狀を伴はず、頭部が明瞭でなく、何時も憂をされて居るか、又は憂がかゝつて居るやうで、何事にも振舞が續かず、物事に飽き易く、氣は散亂し、兎角悲觀に陥り易く、不愉快でならないといふやうなのは「**神經衰弱を治す**」と、思念して、頭部へだけ十五分間も治療すればよろしい。

【注意】 神經衰弱患者は何事にも飽き易いのです。そして神經衰弱症は腹の痛いのを即治せしむるやうに、唯一回の治療で風光月の状態にはなりません。全治までには輕症も一週間、重症は數週間も持續治療せねばなりません。一二回ではさう効驗が分らないことも、四日五日と治療を續行すると、丁度減はれた薄雲が少しづつ取れて來たやうに輕快になつて參ります。それだのに一

二回の治療で中止するやうなことは、患者の不利を導きでなく、術者も亦快しとせぬところであり、この病は必ず治るのであります。初め患者に對し「**神經衰弱症は元來物事に飽き易い病氣です**。そして**神經衰弱症は一二回の治療でさつぱりと全癒する**といふわけには參らぬ。三回四回と續ける中に、薄紙を一枚づつはがすやうに治つて行くのであるから、そのつもりで、私のいふ期間（術者の見込みの一週間とか二週間とか三週間とか）だけ治療を受くる覺悟でなければ初めから治療はお断りです。一二回だけで止めるやうでは貴方もつもらないし、私も不満足である。私の見込みだけ治療を受けらるれば必ず全治して、眞に生れ變つた爽快の心身となられるのですから、私の見込みだけ治療を受くるの決心がついたならば、熱心に治療して必ず全治せしめます。」

と、説き聞かせた上、患者がその決心になつたら初めて治療をしてやるがよろしいのです。さうでない、唯一二回の治療で全治せざる病氣であり乍ら、その事は臆に上げて、一二度治療して貰つたが治らなかつたなどと懸念をするやうにならぬとも限りませんから、相互の満足利益のために、以上の注意をしてから治療するやうになさねばなりません。

神經衰弱症は醫學療法では治療は不可能であります。然るに現時わが國內に神經衰弱症に悩まされ、醫藥その他の療法も更に効驗なく、鬱々として、その日を送つて居る者幾萬あるか知れない。而も強烈なるは悲觀のドン底に入り、自殺を企てる者さへ尠くない。實に國家の憂慮すべきである。

しかるに幸ひなるかな、わが醫學療法に於ては、如何に重症神經衰弱症も必ず全治せしめ得るのであります。従來、それを根治せしめ再生の喜びに浴せしめたる患者は實に多數に上つて居るのであります。

ヒステリー症 ヒステリー症これはなか／＼厄介な病氣であります。何も怒らなくともいゝのに怒つて見たり、悲しまなくてよいことに悲しんだり、漫りに取越し苦勞をしたり、器物を投たり、破壊したり、矢忽に人に當り散らしたり、それが一時するとカッリと晴れた氣分になつて、さつきはなぜあんな脚氣な事をやつたんだらうかと後悔したり、他人が疑むるの好意は之を避に取つて

、已れに不利益なやうに曲解したり、さも重病人でもある如く、人とも口を利かず、確々食事もせずに臥つて居たかと思ふと、その翌日は化粧などして外出散歩をしたりして、昨日と今日の容態とは全然天地の違ひを生じたり、嫉妬心や猜疑心が深くなつたり、手足が冷たり、しびれたり。それは、實に厄介至極の病氣であります。

主婦がヒステリー患者であれば、その家庭は常に暗雲低垂として不快の氣漲り、ヒステリックの妻を持つ夫は、最も不幸なる人と申すべきであります。種々なる悲劇もこのヒステリーから演ぜられたる實際は世に澤山あります。

この忌むべく臆ふべく且怖れむべきヒステリー症は、醫學療法では治癒せしむることが出来ないのであります。それが爲にヒステリーの妻によつて苦しめられつゝあるの醫師は、世に尠くないのであります。

わが醫學療法に於ては、永年のヒステリー患者でさへ、愈快せしめたる實際が海に多いのであります。

ヒステリー症には心臓、胃腸、子宮病、性能障害等の件なふがあるから、その場合には、その症候の全部を思念して、初め頭腦へ充分に治療法を行ひ、後仰臥せしめて、心臓部及び下腹部(子宮の上位)へ治療法を行ふてよろしい。

癲癇 癲癇は、海に危険なものであります。癲癇に水癲癇、火癲癇、人てんかん、及びその他のてんかんがあります。水てんかんと申すのは、水を見ててんかんを起し、火てんかんといふのは、火を見ててんかんを起し、人てんかんといふのは、人集まりの中にあつて、てんかんを起すのを申すのであつて、この外、それ等に關せず、何時とはなしに突如、癲癇を起すのがあります。

癲癇を起すと、齒は食ひしめ、涎を吹き出し、手足に痙攣を起し、また、その筋肉が硬直して、人事不省に陥るのであります。歩行の途中でてんかんを起したり、火てんかんが、火の中へ落ちて死んだり、水てんかんが水に溺れて死んだなどの例は、隨分世の中にあります。ですから、てんかん症の者は、驅りて外出するのは眞に危険といはねばなりません。

此、備れむべく、また危険なる癲癇を治癒しするには、關天と後頭部とへ、時間を長く、充分に治療すればよいのであります。不眠症 不眠症には、醫術では、カルモチンやモルヒネを催眠薬として使用するが、それは一時的の効能しかないから不眠症の

者は度々これを使用する。さうすると、それが習慣性となつて、それが服用を連續せねばならぬやうになり、藥量も以前と同量では効がなくなつて、次第に藥量も増加することになり。これがために恐るべき中毒を起すものさへある。

わが醫學療法では、不眠症は實に容易に快癒せしむる。醫藥効なき四十日間の不眠症も唯一回で根治したるを始め、不眠症を根治せしめたる實際何程あるか知れませんが、不眠症を治療するには、頭腦部へのみ二十分間も治療すればよろしいのであります。

第二類 眼病 Ⅱ ソコヒ、トラホーム、ノボセ目、角膜、網膜、ホシ目、其他眼病治療法

眼病は、ソコヒでもトラホームでも又は角膜炎でも、其他總ての眼病及淚腺病は、初め頭腦へ一回だけ治療法を行ひ、それから、額から眼の上へ手を軽く觸れて治療法を行ふ。決して眼球を上から壓するやうなことをせず、患者に苦痛を感じしめぬやう注意せねばなりません。

角膜炎の如きは、眼蓋から來て居るのでありますから、思念には「眼蓋を掃除し眼病を治す」とやつて、頭腦部へ片手眼蓋上部へ片手を觸れて二十分間位づつ治療法を行ふことにするのであります。

二十年間のソコヒや十餘年間の失明患者を全治せしめた實際もあるのですから熱心に治療して、備れむべき眼病患者を救ふてやつて下さい。

第三類 鼻の病 Ⅱ 肥厚性鼻炎、鼻加答兒、鼻出血、鼻炎、著膿症、赤鼻、其他鼻に關する病治療法

鼻の病は肥厚性鼻炎、鼻加答兒、著膿症、鼻炎その他鼻に關する總ての病は、初め一回頭腦部へ治療法を施して、後仰臥せしめ、

縮と鼻柱へ手掌を當て、治療法を行ふのですが、蓄膿症は片方の手掌を縮と鼻柱へ當て、片つ方の手掌を頭頂部へ當て、時間を長く治療法を施してください。

醫術に於ては、鼻痒や蓄膿症を手術してその鼻痒を取り、膿を取る。それで患者は一時輕快の状態となるが、これは根元治療でなく、その現はれたる障害を取り除くだけであつて、その根元は具備になつて居るのであるから、鼻痒はまた隆起して來、膿汁は再び滲み出して來るのであります。

わが靈學療法は、病の根元を除去する根本治療法であります。しかし、醫術が出たる鼻痒を忽ち切り取り、又は切斷して膿汁を忽ち排除するやうなことは出来ませんが、醫術よりは少し時日がかかりませうが、醫術の如き一時的治療法で再發するの虞れあるに比し、靈學療法は根元的で再發の憂がないのであります。

鼻痒なり蓄膿症で醫術で而も治し得ざりし難症を根元治療し、それ等の人々は今健康に活動しつつあるの實際が澤山あります。

第四類 耳の病、中耳炎、耳鳴、耳ダレ、耳痛、聾、其他耳に

關する病及び啞治療法

耳の病の體ては、初め頭頂部へ數回治療法を施し、それから耳へ手をあて、治療法を行へばよろしいのであります。

耳鼻咽喉に屬する疾患は、概して根元と見え、靈學療法で一すで癒らないのが多く、耳鼻咽喉の専門醫に數十日數ヶ月といふ長い期間、治療を受けて居る患者が常に多いのであります。

わが靈學療法では、耳に關する諸病を短期に於て、全治せしめたる實際が多くあります。

中耳炎などは、急速に進展して醫術では手術するといふことになるが、わが靈學療法では、一二回の治療で全治せしめたる實際が澤山あります。

耳ダレは初期のものなら、容易に全治せしむることが出来ますが、何年といふ水い間の慢性病なのは長く治療せねば治りません。鼓膜の破れたのは、幼業者のは回復しますが、大人のは容易ではありません。

しかし、聾でも治つた實際はいくらもありません。

啞 啞といふ不具者は前に述べたものであります。聾は、野口孝子といふ患者を治したことがあります。これは生來の聾ではなく、十二三の頃ほひ聾となつて、随分、手に手を盡くし、或耳鼻咽喉科が、一ヶ年でたしかになはずなど、誰かさるゝとも知らず、それを信じて全一ヶ年間治療を受けたが、少しもよくならないといふ有様で、本人は勿論、其親も共に悲觀の淵にその日を暮して居つたが、私は二ヶ月半治療してやつたところ、だん／＼と耳も聴こえ、また口も利けるやうになり、遂に全治して能く自由なくなり、その後お嫁にいつて、たのしき生活をやつて居ります。

生れ乍らの聾者は、まだ手にかけてたことがありませんが、これとて、長期治療するに於ては、必ず全治し、大なる喜びを與へることが出来ること、私は斯く信ずるのであります。

患者があつたら、どうぞ救ふてやつてください。

第五類 口中の病、口内炎、舌の病、齒痛、齒齦病、ムシ齒

其他口腔に關する病治療法

口内炎、舌の病などは、上唇へ手を當て、治療する。この場合鼻孔へ手を觸れると、鼻息が苦しくなるから、注意して鼻孔に手を觸れないやうにして治療法を施さなければなりません。

齒の病は、その病むところを頬の上へ手をあてて治療する。齒齦などは成るべく一回の治療でなはずやうになさるとよい。輕いのなら二分か三分間位の治療でなほります。實の悪いのになると、二十分三十分とかゝるものもあります。また、一度、痛みが止まつて、數日後又は翌日になつて再度痛み出すものもありますから、さういふのは二三回續けて治療することになさるといふ。口熱などは

、一回の施術で見ている中に、その脈が引いて了ふといふやうなわけにはまみりません。施術後次第々々に腫肉も平癒するといふことになりす。

極度の悪い歯痛患者に治療法を施すと、施術中、却つて苦痛を増して来るのがある。これは、強き病魔が靈力に反抗せんとするのであり、一層熱烈に治療法を施す時間も長く行ふことになさい。さうすると、施術終つて後、間もなくスーと痛みは取れて快癒いたします。

曾て或婦人患者であつたが、上下其全部の歯根が緩み浮へて、齒科醫に十日餘りかゝつたが少しも効めがないといふて、困り抜いて、私の治療を受けに来たのを、唯一回の施術でスッカリ歯根がしまり全治したのであります。熱心におやりなさい、どんな歯の病でも必ずなほります。

第四節に於て申述べておきましたが、又今こゝに繰返して御注意までに申しておきます。それは、何病でもはじめ頭部へ一回治療法を行ふことでもあります。(但し第一類の病氣に就てはその説明通り)これは決して忘れてはなりません。何故かと申せば、凡そ精神の根柢は頭部にあります。虚偽精神の根柢も亦頭部にあります。初め頭部へ一回治療法を施すのは、即ち治療の當初に於て、その虚偽精神の根柢に向つて、その病氣を癒すべきこと、乃ち、病魔を驅逐降服せしむることの宣言を下すのであるから、必ず行はねばなりません。

この後、諸種の病氣治療法の説明中に、初め一回頭部へ治療法を施して、といふことを略して、殊更に述べなくとも、初め一回は必ず頭部へ治療法を施し、それから各患部に治療法を行ふものであることに御承知置きを願ひます。

第六類 咽喉病、扁桃腺炎、氣管支炎、ルイレキ、其他咽喉に關する病治療法

右の諸病は手を下顎部へ觸れ手掌を咽喉へ觸すやうにして施術を行ふ。ルイレキはその患部に手を觸れて治療法を施すのであります。

第七類 肺病、肺炎、肋膜炎、痰、咳、百日咳、喘息、感冒、流行性感冒、食道狭窄、乳腫、乳汁不足治療法

肺病 肺病はその右肺か左肺か病める肺部及胃腸部と、病める肺部の後方、即ち右肺なれば、右肩胛の後下部へ施術を行ひ、喉を病める者なれば、以上のことを兩方部へ行ふことは勿論のことでもあります。

一、病人は病念に捉はれて居るのであります。殊に肺結核患者は病念に捕はれることが懸念であります。肺病を治す薬はない。肺病に罹ると一生治らない。肺病は死病である。と、肺病に對する世人の感想はさうなつて居る。それで一度肺病になると、患者は悲觀のどん底に沈み、強烈な恐怖の感念に脅かされ、益々その病勢を進めるのであります。

ですから、肺結核患者を治療するに當つては、先づその病念を除去せしむることが肝要でありますから、左のやうな話しを聞かす。

「肺病といふのは治るべき病氣であるから、決して恐るゝことも、悲觀することも要らぬ、全く心配無用である。世界醫學界に於て認むるところによれば、百人中九十八人までは肺結核菌を保有して居るさうである。斯くの如く肺結核菌は肺病患者に斗り有るのではなし、殆ど誰人にも有るのであるが、肺結核菌を保有して居つたからとて、必ず肺病になるとは限らない。肺結核菌が健全であれば、何程結核菌が居つたところが、更に肺結核菌は犯されない。結核菌に肺結核菌が犯されるのは、精力が衰退して、肺の内分分泌作用が鈍りたるが故に、そこに結核菌は猛威を振ふることになつたのである。故に精力を強大にし、肺の内分分泌を旺盛ならしめ、その作用によつて結核菌を死滅せしむることにすれば、肺病は立派に全治するものである。」

わが靈療法は、人間の精力を強大ならしむるは勿論、肺臓の機能を健全にし、その内分泌を旺盛ならしめ、食糧細胞を増多活動せしむる偉大なる治療法であるから、この治療を受くると、結核菌は死滅し、犯されたる肺組織は回復して健全となり、病氣は全くなほつて終ふのでありますから安心なさい。

曾て、各醫院で博士等の説教を受け、遂に回復の望みなしと、死の宣告を與へられたる水戸の一青年黒澤君が、我靈療法によつて立派に全治し、健康はますます増進して、その後東京に於てテニスの選手になつて居る位ですから、安心して治療を受けなさい。しかし、如何に偉大な靈療法を施しても、患者自身の不衛生によつて、精力を減退せしむるやうでは、治療の効果を妨げ、快癒の期間を後れさせますから、衛生に注意して貰はねばならぬ。

慎むべきことは、心身を勞すること、房事を爲さざること。爲すべきことは、努めて日光に浴すること、新鮮の空気を吸ふこと、遊樂豐富の飲食物を適宜に採ること、熱なく氣分よき時は勞せざる程度の運動（散策）を爲すこと、心を平靜に持つべきこと。右の事を守らるゝに於ては、全快は速かでありますから、必ず守ることにせねばなりません。」と、

患者によく理解及慰安を與へ、且衛生を守らすやうに努めて、熱心に一日二回づつも治療してやつて下さい。さうすれば、ズン／＼と快方に向ひ、全治の喜びを見ることが必ず出来るのであります。

肺患者を取扱ふに、嫌な顔などしてはなりません。眞から同情の心を以て、一日も早く全治せしめんと熱心な心で「必ず治す」の強き信念を以て治療してやつて下さい。

肺炎 肺炎はその侵されたる肺臓と胃腸部へ治療をする。

肋膜炎 肋膜炎は乾性濕性の別なく、その病める方の脇下部に治療法を行へばよろしいのです。

肺炎 肋膜炎など發熱直に治療すれば愈ち治つて了います。時日の餘程経過したのや慢性のものは、相當の期間を要することは勿論のことあります。

痰、咳、嘔、嘔はともに、咽喉の直下部へ治療法を行ふ。

百日咳 百日咳はその名の如く、百日もかゝらねば治らぬと昔からいうてゐる病氣で、しかも、この病氣は子供に多く、その子供自身も苦しいが、それを見て居る父兄は尚苦しい。

百日咳には、下頸部と胸の上部とに兩手を同時に觸れて、治療法を行ふのです。短日に於て全癒せしむることが出来ます。百日どころか、十日もかゝらないで治ります。

喘息 喘息は氣管支或は心臓を腫されて居るから、心臓を腫されて居るものには、咽喉直下部と心臓部へ左右の手を當て治療をする。心臓を腫されてゐぬならば、喉、咽喉直下部のみ熱心に治療すればよろしい。喘息は難病の一つで殊に遺傳性のものはその病根が深いのであるから、短日では全癒は難かしい、豫め患者に難病なるを説き聞かせ、根氣よく治療を受くるやうにさせねばなりません。

喘息は、夏冬共に起るのもあれば、夏だけで冬は起らないのもあり、夏は何事なくて、寒さに向つてから起るものもあります。それは何れにしても、喘息患者の苦しみはひどいものであります。

醫藥療法で、服薬をしたり注射をしたり吸入をしたり、その他いろいろの治療法を十數年間試みても全治しなかつたやうな、頗る重症の喘息患者を、わが靈療法短期間の治療で全治せしめたる實例があります。

感冒、流行性感冒 感冒の病源は世界の醫學界に於て、未だに不瞭となつて居るのであります。従つて感冒の根本的治療法は醫學界にはなく、唯下咽又は發汗療法を行ふに過ぎないのであります。

しかも、昔から感冒は風病の基とさへいうて居る位で、グツ／＼してゐると種々なる病氣を誘起するものであるから、速かに、これを全治せしめねばならぬのであります。

わが靈學療法では、初發のものなれば、一回の施術に於て殆ど下熱し、一回又は二回の施術にて全治せしむることが出来るのであります。

感冒を治療するには「かぜを治し熱をさます」と思念して、頭部へ十分間位施術し、それから胸の上邊及胃腸部へ十分間も治療法を施せばよろしいのです。

なぜ、胸の上邊及胃腸部へも施術するかといへば、肺炎又は胃熱等を防ぎ或はこれを治療するがためであります。

食道狭窄 食道狭窄は、喉頭から胃にいたる間へ兩手をあて、施術する。

乳腫 乳腫は苦痛なものであります。これは乳の上へ軽く手を觸れて治療を行へばよろしい。乳腫は驟然に病勢が進むものから、時間を長く施術して、その病勢を挫き、少時も早く全治せしむることにせねば不可せん。

乳汁不足 乳汁不足の者は氣の毒なものです。乳汁不足のときは牛乳とか人造乳等を代用とするしかないが、乳児を育てるには母乳に勝るものはない。しかも、牛乳なり穀乳なり適温適量のものを用意して與ふるといふことは容易なことではなく、もしその適度を過ぐると乳児の健康を害することになる。この氣苦勞と、時間を費消すること、乳價の支拂ひを見ると、一ヶ年の損失は甚大であります。

わが靈學療法では、乳汁不足の者に施術し、乳汁を本能的に豊富ならしめた實例が澤山あります。

乳汁不足の治療法は「乳汁を豊富に出す」と思念して乳房の上へ手を觸れて治療法を行ふのであります。

第八類 心臓病、肝臓病、腎臓病、萎縮腎、糖尿病、膽石病、黃疸、丹毒症治療法

心臓病 は心臓部、肝臓病は肝臓部、腎臓病は腎臓部、萎縮腎は腎臓部と腹部、糖尿病は胃腸部、丹毒症は頭部へ治療法を行へばよろしい。

胸内臓の位置等に就ては巻末に掲げた人體解剖圖で御承知ありたい。

心臓病 は醫藥では根本治療は出来ないが、わが靈學療法では根治するのであります。二十年間も醫藥その他あらゆる療法でなほならなかつた、重症患者が僅五週間の施術で全快し腫し泣きになつて居るのがあり、また心臓へヒビが入つたので、死なねば治らぬと多くの醫師から見放され、死の宣告を與へられたる患者が、完全に全快し愉快に活動しつつあるのさへあります。

また、腎臓病 殊に萎縮腎などは理醫醫藥では癒らぬことになつて居りますが、わが靈學療法では、この種の患者を全快せしめたる實例少くないのであります。腎臓病患者には點類を探らせぬやうに御注意なさい。

膽石病 などは、醫術で手術することが多いが、わが靈學療法では手術などせず、藥々として立派にそれを治します。曾て膽石病で郵遞醫大で治療を受けてゐた、新潟市の人、本井氏といふのが、腹中に拳大の膽石が生じ、醫大で手術することになつたのを、本井氏の弟の大家氏が、その手術を遊説して、私のところへ遠隔施術を依頼されたので、私は毎日遠隔施術を觀察すると、丁度四日目のこと、今まであつた腹中の膽石は忽ち消え失せて、更に形も形もなく、全く消散して健康を回復し、その後ますます健康に此世を送つて居ります。

わが靈學療法は、膽石を溶解し離脱せしめ大小便に混じて體外に排泄せしむるのであります。

醫學では、腎臓病と膀胱病と併發したる場合には、兩病同時に治療することが出来ない、しかし、わが靈學療法では兩病に對し同時に治療法を行ふて全治せしむることが出来るのであります。

第九類 胃酸過多症、胃酸過少症、胃潰瘍、胃アトニー、胃擴張、胃下垂症、胃癩、胃痛、胃加答兒、瘧、治療法

第九類の胃に關する病氣は胃の部へ施術すればよいのであります。

わが靈學療法は、生命力を活潑旺盛ならしむるのでありますから、健全細胞を増やし血液を清淨に、その循環をよくし、筋肉の弛

を凝縮し、硬變したる筋肉はこれを軟化し、分泌作用を調節し、新陳代謝を盛んにし、老廢物や毒素を排除し、一切の障礙を除去し以て正しき身体とならしむるものであります。

いま、第九類及び第十類の病症に對し、醫學療法を施せば、即ち胃腸の機能を旺盛にし、消化吸収を完全にし、停滯せる飲食物や腸管分泌物を排泄して胃腸内を清潔にし、大小便通を正調にし、老廢物を排除する。そして血液内へ増多せしめたる白血球の活動によつて、患部に滲透せる悪血や毒素を排除し、有害菌を滅菌し、靈力によつて生成増殖する健全細胞によつて、一切の病的細胞を滅し、以て病質を改變して健康を造成するのであります。

たとへば、胃擴張、胃下垂、胃アトニーの如きは、弛緩したるその筋肉を凝縮し、胃腸の如きは、その總腸を腸より縮小し、胃潰瘍は健全細胞の増殖によつて潰瘍面を癒着する。胃、腸加答兒は健全細胞によりてその患部を癒着せしめて治療するのであります。胃腸病患者には、不消化物、脂肪過多の物、刺激性の物などを飲食せぬやう、また、成るべく、少食にするやうにさせて下さい。尙胃腸過多症患者には、靈力を成るべく飲食せぬやう注意して下さい。胃腸に關する疾病は、醫藥に見放されたる患者が、これまで多數全治して居りますから、ドンク治療してやつて下さい。むこり は頭部へ十分位その後胃腸及肝臓部へ治療法を行ふ。

第十類

腹膜炎、腹膜水腫、盲腸炎、腹痛、腸加答兒、便秘、下痢、腸室扶斯、其他腸の病、脱腸、麻疹治療法

腹膜炎 腹膜水腫等は腹腔部、盲腸炎は盲腸部へ治療法を行ふ。盲腸炎などは發病して時日を經ぬものなれば一二回の治療でなほります。

腹痛 腸カタル、便秘、下痢、腸チブスその他腸の病は何れも腹腔部へ治療法を行ふ。

脱腸 はその脱腸する部位へ治療法をする。脱腸患者には、脱腸帯を常に用ひさせて置くこと宜しい。さうでない、なほりが遅

いのであります。

麻疹 は、頭部へ十分間位、後胃腸部へ十分間位づつ治療法を行ふてよろしい。

この麻疹は内攻したり肺炎を誘發したりしますから、成るべく長時間治療を行ひ、速かに快癒せしむることが肝要です。

第十一類

疝氣、膀胱炎、睪丸焮衝、睪丸炎、淋病、消渴、肛門周圍炎、痔疾、脱肛、梅毒治療法

疝氣 は下腹と腰部へ膀胱炎は下腹腔部へ治療法を施し。

睪丸焮衝 睪丸炎は睪丸に治療法を施す。

淋病 は男根の上部、消渴は女陰の上部へ治療法を行ふ。慢性の淋病や消渴が一二期又は短期間の治療で全治した實例が幾らでもあります。

肛門周圍炎 痔ろう、痔核、瘻管、脱肛ともに何れも肛門に治療法を行ふ。

梅毒 は頭部へ十分に、そして胃腸部それから、よこねの者にはよこねの部へ、かんぞうのものには男根に治療法を熱心に行ふ。遺傳性梅毒は根が深いのですから治療も長時間を要しますから、それを患者にも話して、治療することになさい。

この第十一類の患者には、酒類カランその他刺激性の飲食物は治療期間中、絶対に禁止せしめた方がよろしい。

第十二類

卵巢病、子宮内膜炎、其他子宮諸病、月經不順、月經閉止、月經痛、血の道、性慾不能、冷症治療法

卵巢病 は卵巣部、子宮内膜炎、子宮腫脹、子宮後屈等は下腹部(子宮の上位)へ治療すればよろしい、醫術に於ては、これ等の疾患に對しては、陰部開閉、子宮洗滌、又は手術等をするが、これは靈道に背反したる治療法といはねばならぬ。

わが醫學療法は、醫術の如き反倫の治療法ではない。唯、着衣の上へ手を觸れ又は着して治療をする。病人や患者に直覺せずして遠隔治療で治療せしむることが出来るのであります。

月經不順 月經閉止、月經痛は頭腦へ數回治療法を施して、それから、下腹部へ治療するのです。三戦間の月經閉止が二回の治療で通經するやうになり、數ヶ月來の月經痛が矢張り一二回の治療で全治したる實例があります。

子宮前屈 子宮後屈も數週間の治療にて正位に復せしむることが出来ます。

血の道 血の道といふのは、婦人病で、腰や手足が冷たり、頭が重かつたり、痛かつたり、肩がこつたり、その他いろいろの病状を呈するのであります。血の道の治療法は頭腦へ十分間位と、心臓部及び下腹部とを十分間位治療をすれば宜しいのであります。

性慾不能 性慾不能は「性慾を増進す」と思念して、頭腦へ十分間、下腹部へ十分間治療を行ふてよろしい。數年間性慾が全然起きなかつたのが一週間の治療で頗る旺盛になつたのがあります。

冷性 冷性は頭腦へ數回、心臓、胃腸、下腹部へ治療を行ふのです。六十年來の甚だしき冷性が唯一回の治療によつて、靈驗著るしく、全身温みを生じ、夏でも足袋を穿かねば凍げなかつたのが、寒中、治療を受けたその日から、足袋も要らないやうになつた實例もあります。

第十三類 動脈硬化症、血脈亢進症、中風症、不隨症治療法

動脈硬化症 動脈硬化といふ聲を聞くと、誰人も直、血脈高きを思はしめ、また、恐るべき腦溢血、中風、狭心症などを聯想するのであります。

そして、動脈硬化症の原因としては、物的秘傳たる醫學に於ては、
一、肉食、飲食過多 二、酒、煙草の過飲 三、運動不足、肥滿性の者 四、房事過度、心身の過勞 五、慢性咳嗽、遺精性咳嗽

六、腎臟病、糖尿病、肥癆病その他を擧げて居るが、これ等は何れも、奢侈、貪慾その他の虚偽精神の發露であります。この、動脈の硬化を來せば、第一に自覺の出来るのは血脈の高まることとあります。假令ば、四十歳の者なれば、百三十ミリメートルが適當の血脈であるのに、動脈硬化症になると、血脈が高くなつて百五十ミリから二百以上三百ミリにも亢進するのがある。動脈硬化症といふのを醫學的説明によると、動脈組織内に糖質の變化を起したために、その組織に欠陥を生じ、兩次石灰分を沈着して、動脈のその部分が硬固となり、また閉塞したり、或は血液が凝縮して血管に障礙を起し、延いて腔内五臟八腑の糖質の變化を起すに至る状態をいふのであつて、この動脈組織の欠陥を生じた部分が、血管に堪へられなくなつて遂に血管破裂して多量の出血を來すのである。動脈組織を養ふところの動脈硬化による血管破裂が腦溢血で、戦慄すべき卒中心症を起し、忽ちとして死するか、その輕さも軽死不隨となり、言語また自由を缺き、不具者同様となる。

心臓組織の血管硬化は、心臓筋肉が老齡退化してその機能を中止し、腎臟血管の硬化は萎縮腎となり尿毒症を起し、その他の諸臓器の血管の硬化も老衰を早め、延いては天壽を縮める原因となるのである。と説いて居る。以上、醫學者の説明は未だ完全なるものとはいへないが、兎に角、動脈硬化に因つて血脈は高昇し腦溢血を起し、また、狭心症を起し、萎縮腎を起し、早老ならしむることは事實であります。

尚、動脈硬化症の自覺的症狀は、血液循環不調のために、脈搏の不整を呈し、また緊張し、遲徐硬となり。五臟の機能が弱つてくる。のぼせ易く、肩がこり、首筋より頭部にかけて痠痛を起し、時折眩暈をおこす。耳鳴りがする。便泌する。歩行の疲勞、息切れ、動悸を訴へ、心臓部に多少壓迫感をおこし、頭重く、記憶力減退、尿尿の量の不規則、手足の冷たりしびれたり、長き精神勞働に堪えず、不眠症をおこし、感傷は危鬱して、些事に立腹し、怒鳴つたり、泣いたりする。また、口惜しがつたりする。性慾、精力ともに衰退を來す。

血脈亢進症 血脈亢進症は動脈硬化の人、腎臟炎の人などが多いのであるが、中には本能的(固有の性格前世の罪惡)血脈亢進

症といふのもあつて、腎臓炎も動脈硬化の症状もない人がこれにかゝつてゐるのがあります。また動脈硬化、血圧亢進症は肥満した人に見られるのではなく、普通體又は瘦せた人にも多いのであつて、肥満した人でもこれにかゝつて居らぬものもあります。しかし、知らずしてこの病態に付されて居る人が多いのですから、誰人でも自己の血圧は計つて見るの必要があります。

近年、わが國に於て、血圧亢進のため、腦溢血で倒れる者益々多くなりまして、統計の示すところによれば、東京府市のみで一ヶ年間に約六千人もあるといふのですから、全國を通じて八十萬人にも達してゐやうと思はれます。それに、血圧の亢進は働き盛りの四十歳以上の者に多いのですから、このまゝ放置して置いては、國力の減衰となりまゝです。動脈硬化、血圧亢進症は極力これをなほさねばなりません。しかるにこの病態を全治せしむべき療法は世にないのであります。醫藥療法では、唯血圧亢進の下降を促がす程度に止まつて、血圧を必ず降下し再び亢進せしめぬやうには出來ず、即ち治すといふことは不可能であります。動脈硬化、血圧亢進症に對する治療の現状斯くの如くであつては、わが國民乃至世界人類のために海に心細いわけであるが、こゝに幸ひにも、之等の病態を根治すべき、わが醫藥療法がある。以て大いに人望を強うすることが出来るのであります。

動脈硬化、血圧亢進症の者に、わが醫藥療法を施せば、百發百中、しかも、即座に血圧を降下せしむることが出来るのであります。二百六十、二百八十ミリといふ高血圧も、十分乃至十五分間の施術によつて、即時に、百乃至百二十三ミリを降下せしめ得るのであります。

この血圧下降の實驗こそは、正にわが醫藥療法が、腫瘍の治療法中最も優勝たることを立證するものであります。さて治療方法を教示いたしませう。先づ、頭腦へ十分開程施術し（動脈硬化より来る血圧亢進にして、腎臓病を伴ひ、また、肩こり、不眠その他の自覺症狀あるものは、その總てを患念に加ふ）それから強動脈及肩、仰臥せしめては、心臓、胃腸部、腎臓部等に十分以上治療法を施すのであります。

動脈の硬化なき血圧亢進症に對しては、頭腦及心臓部へ治療法を行ふ。

患念に就ての注意 前者の場合に於ては、動脈硬化をなほし、血圧を必ず降下せしめ、肩凝り、腎臓病、不眠症をなほす。

と思念し、後者の場合には、「血圧を必ず降下す。」と思念すること。

動脈硬化、血圧亢進患者を取扱ふには、施術前に血圧計を以てその血圧を計り、而して、施術後復血圧を計るがよろしい。さうすると、患者自身がその血圧の下降を即座に確認することが出來、患者は大いに喜び且安心するとともに、わが醫藥療法の眞に偉大にして、靈驗の顯著なることを認識せしむることとなるので、これ即ち相互の利益のためであります。

血圧が昂進すると命にかゝはるといふやうなことは誰人も承知して居ることではあるが、しからば、一体、適當の血圧とはどの位をいふのであるかは知らぬ人が多いのであります。いま、御參考までにお話申上げます。

十七八歳から四十歳位までの男子は百十ミリメートルから百三十三ミリメートルといふところで、平均百二十ミリと心得て居ればよろしい。四十歳からは、その年齢に九十を加へたる數を以て標準とします。即ち、四十歳なれば百三十三ミリ、四十五歳なれば百三十五ミリ、五十歳なれば百四十四ミリ、六十歳なれば百五十五ミリといふ風に。しかし萬人一體でなく體質によつて五つや十位高低の差もあります。そして婦人は男子より低くして、十位は低くなつて居りますし、また、運動直後、飲酒後、睡眠不足等の場合は高いのであります。二三歳位の子供は八十位のものであります。

血圧計は 高價でも正確なのを使用するのがよろしく、安價なるものは、不正確だつたり、狂ひや破損したりします。

本症患者の養生法として注意すべきことは、肉類の茹き、脂肪蛋白質の多きもの、アルコール性即ち飲酒は嚴禁、喫煙も悪く、心身の過勞もよろしくない。新鮮な野菜類や、海草類たとへばワカメ、ヒジキ、昆布といふやうなものがよろしく、適當の運動や休息等は必要なことあります。

中風症、不隨症 既に動脈硬化、血圧亢進症、または遺傳性發現のために、頭蓋血を起し、中風症となり、不隨状態に陥つた

ものを治療するには、頭部、頸部、胸部、心臓、胃腸部及その付随となりし四肢、言語不自由の者は、延髄部へ、また、腎臓病、尿管症併発の者には、腎臓部及び下腹部へ治療法を行ふのですが、この治療は全部で二十分乃至三十分間も行ふことにして下さい。

そして、本症患者には、前段に示した、動脈硬化症、血圧亢進症患者の養生法を厳守せしむることにして下さい。

第十四類 脊髄諸病、筋肉ロイマチス、關節ロイマチス、筋肉炎、關節炎、骨膜炎治療法

脊髄病 脊髄痛その他脊髄諸病は、頭部と脊髄部とをまたいだ治療法のために内臓機能に障礙を来たしたる者には、その患部へ充分に治療法を行ふ。

筋肉ロイマチス 筋肉ロイマチスは頭部とその患部へ治療する。

關節ロイマチス 關節ロイマチスは頭部と、その患部へ治療法を行ふ。

ロイマチスは、心身の過勞、冷、極寒等から来るが、極寒から来たのは難症でありますから、見込みの期間を長くせねばなりません。極寒でない急性關節ロイマチスや筋肉ロイマチスで、寒解熱もなくであれば一回または數回の治療でなほるものであります。極寒患者には「極寒を消滅し、ロイマチスをなほす。」と思念すること。

ロイマチス患者には、脂肪性と揮散性アルコール性の飲食物を禁ずることが肝要です。

筋肉炎、關節炎、骨膜炎 この三種とも、その患部に治療すること。筋肉炎、關節炎とも輕症なれば一二回でなほります。腕の筋肉炎で内部化膿し、腫は曲り、一週間も舌痛甚だしく、食事もせずに痛み、特に醫師の手術を乞はんとした重症を、十日間で全治回復せしめたことがあります。

骨膜炎 骨膜炎で骨が腐つて来るので手術するのが多くありますが、まことに慘めなことで、不具者にさへなるのがあります。

曾て、九年間の骨膜炎で、醫の手術を受けること數回、痛治る見込みなかつたのを、秘の一週間の治療で全治したのであります。

第十五類 神経痛 顔面、肋間、腰骨、手足其他神経痛治療法

神経痛 神経痛といふのは今の世になかく多い。そして、それをなほす完全の藥物や療法がないので、この病氣のために悩んでゐるのが多いのであります。

神経痛は心身の過勞、冷、又子宮疾患等から来るのであります。

治療は、頭部へ充分に、それからその患部へ、子宮疾患から来て居るのは、子宮部へも治療するのであります。神経痛患者には揮散性の飲食物を嚴禁せねばなりません。

第十六類 脚氣、産脚氣、壞血症、痲痺症、痲痺治療法

脚氣 脚氣は從來、幾年の長き間、白米食がその原因であるとは醫學界の唱道するところであつたが、最近、松村醫學博士は、南洋、南洋、印度、南支那等に於ける脚氣病状態を觀察研究したる結果、脚氣病は白米食の缺陷よりではなく、一種の毒素に因るものであるとの新學説を發表且確認したので、醫學界へ大反響を興へたとの事であるが、これで見ても、醫學なるもの、如何に不確實不徹底のものであるかが明らかであります。

それは、垂も角として、脚氣病を治療するには、頭部へ五分間、心臓部と胃腸部へ十分間、それから喉部の直下内臓と、喉部の中尖部とへ、左右兩手を觸れて各五分間づつ治療するのであります。

慢性になつたのは、さうもいきませんが、初發のものなれば、浮腫性のももの、痲痺性のももの、一週間の治療で必ず全治いたします。一回毎に浮腫は少くなり、痲痺は減退いたします。

産脚氣 産脚氣は産後發生する病氣であります、これにかゝつた産婦の乳は、乳兒に飲ましては有害であると醫學ではいふて

居るやうですが、わが醫學療法は、哺乳させても、乳児には更に何等の障害もありません。これは、醫學療法の特長によつて、産婦の血液を浄化するの結果で、産婦より出づる乳汁には有毒性なく、清浄となつたものであるからです。

産脚氣は、心臓と胃部及び子宮部を施術すればよろしいのであります。

壞血症 壞血症は心臓部、胃腸部へ治療法を行はばよろしい。

痲痺症 痲痺と申しても、頭部の痲痺するものあれば、手足のしびれるものもあれば、腰や背中のしびれるものもありません。

施術は頭部の痲痺するのは、頭部ばかりでよろしいが、手足などの痲痺は心臓から来て居るものもありますから、それをよく診て、心臓から来て居るのなら、心臓部と患部へ施術せねばなりません。

腹のしびれは、心臓と腹へ、脊中のしびれは脊髄とその患部へといふふうに、その他の痲痺もその部位によつて、それごとく適宜に施術をしてください。

小兒痲痺 は海に氣の露なもので、腰から下脚部が利かなくなり、だんたんに脚は瘦せて来て、一生不具者となつて了ふもので、醫學療法ではなか／＼癒らないのであります。

小兒痲痺症を治療するには、頭部と脊髄と腰推部及脚部等へ充分、時間を長く施術してやつて下さい。この痲痺は短期間ではなほりませんから、そのつもりで、患者の父兄達にも豫めこの旨を聞かせて置きなさい。

痲痺 痲痺即ちヒツタリは、筋肉が緊縮するのであります。胃の筋肉の緊縮が胃痲痺であり、顔面筋肉の緊縮が顔面の痲痺であります。口元のひつつかるのは口角筋が緊縮するからです。手足の筋肉にも痲痺が起ります。

施術は、胃痲痺は頭部へ五分間、胃の部へ十分間も施術すればよろしいのです。顔面痲痺は頭部とその患部へ一しよに施術すればよろしく、その他は、その患部々々へ治療法を行つてよろしいのであります。

第十七類 皮膚病 疥癬、濕疹、シラクモ、ナマズ、其他皮膚病治療法

皮膚病 皮膚病の種は多くありまして、また、中には固る頑固なものもあります。

施術は、何れもその患部へ治療法を施してよろしいのです。

先年、鎌倉へつとめてゐる或青年が、顔面全部へ赤田虫が出て、いろ／＼と田虫の癬を用ひたが、更にきゝめがなく、ますますひどくなつて、その癬を人に見られたくないとて、役所を休むやうになつてから、秘の處へ夜間治療を受けに来た。秘は一回施術して翌日もう一回施術すればよからうから、あす復來なさい。というて歸した。ところが、翌日來なくて、三日目の朝來まして、青年のいふには、一昨夜施術つて、昨朝起きると癬を洗つたところ、癬の皮が大分剥けまして、昨晩また洗つたら殆ど田虫はなくなり、今朝はこの通り奇麗になりました。誠に有がたうございます。と禮を述べた。見れば、跡形もなく立派に治つて居つたのであります。

新澤の渡邊君といふ人の内室で六十歳以上の老婦であつたが、この人は二十年来頭へナマズが出来て困つて居られたが、唯一度施術をしたばかりで、すつかり全治したこともあります。

その體質によつては、なか／＼頑固なものもありますが、長く施術を續行すれば必ず治りますから、熱心に施術してやつて下さい。

第十八類 面瘍、諸種の腫物、吹出物、恙虫、蟻毒、瘡毒、疥虫、胎毒治療法

面瘍 その他諸種の腫物、吹き出物等は何れもその患部へ治療法を行ふてよろしい。

恙虫 といふのは、極小さな虫ですが、これにさされると、その癬のために間もなく危險状態に陥るのです。癬に感るべき虫で

す。しかし、この恐るべき恙虫は何處にも居るといふのでなく、限地的のものでして、我國では、越後の信濃川畔、それも古志郡、瀬浦原郡あたりにしか居らないやうであります。恙虫にさされて直施術すれば忽ちその毒は消えて治ります。その他、蜂であるとか、いろ／＼の毒虫に螫されたのは、何れもその患部及び頭部へ施術すればよろしいのであります。小兒の疥虫は、頭部へ治療法を行ひ、胎毒は、臍や顔面までも出るものですから、その患部を施術すればよろしいのであります。尚、尚胃腸部までも治療して下さい。早く毒が排泄されます。

第十九類 火傷、凍傷、擦傷、打撲裂傷、切傷、打撲痛 挫き等治療法

火傷 凍傷 凍傷とも、その患部へ治療法を施せばよろしい。火傷は直施術すれば、痛みは即治、焼けあともなくきれいに癒ります。曾て、或婦人が精進揚げをやつて居たところ、過つて、その油の煮えたつて居る揚げ網の中へ手を入れた。其時、傷にゐた門人の江口氏が、直その手へ施術すること三十分、痛みの去つたのは勿論のこと、何の火傷のあともなく、婦人の手は元のキレイな手となつたのであります。江口氏は、それから、その地方で神醫と尊敬されるやうになつたのであります。
打撲裂傷 切傷等は、その傷口へ絆創膏を貼つて密着せしめ、絆創膏のない場合には、鶏卵の殻の内側にある白皮をその傷口へはり。（この白皮は粘着力があるから傷口を密着せしめます）また絆創膏も鶏卵もない場合には、その傷の大きいときなどは、傷口を密着せしむるやう注意して細帯をなし、その上から施術を行ふことにする。この施術の患部は「傷を治し、血をとめる。」と思念して、治療法を行ふのであります。
打撲痛 くじき等は、その患部へ施術してよろしいのであります。

第二十類 ソコ豆、疣、痣治療法

ソコ豆 ソコ豆を取るには「ソコ豆を取る」と思念して、その患部へ施術をする。
疣 イボは「イボを除去す。」と思念して、イボのところへ手を觸れて治療法を行ふ。
痣 婦人が顔に痣のあるのがありますが、實に氣の毒なものであります。痣の治療法は「痣を除去す。」と思念して、その患部へ施術すればよろしいのです。
痣は、前世的の多いのですから、一寸では除去しません。長期の施術を要しますから、そのお心得で取扱つて下さい。

第廿一類 吃音、寢小便、寢言、齒ギシリ夜泣癡治療法

吃音 吃音のつらさは、吃音者でなければ分からないといひますが、まことに、吃音は難症なる苦惱であります。吃音のために一生を悲觀し自殺を企てる者さへあります。これを見ても、吃音者が日夜如何に苦悶しつゝあるかを察知することが出来るのであります。
吃音者の多くは、荷めの眞似から、ほんものも吃音になつたのであります。その他は遺傳的のもの、または、精神運動より吃音となつたのであります。
施術法は、頭部へ十分間、下部部へ手を觸れて十分間位づゝ治療法を行ふのであります。
寢小便 寢小便は冷から来て居る病氣と一般は思ふて居りますが、それは間違ひで寢小便は癖であります。冷るから寢小便をするならば、炬燵へ寝かせてあたゝかにさせれば、寢小便はしないわけであるが、それでも寢小便はする。あたゝまつてゐたので寢小便をせぬとか、水を飲まずに寢たから遺尿せぬとかいふのは、ほんたうの寢小便ではなく、ほんたうの寢小便といふのは、いくらあたゝかにして寝かせてもする。また、夜中覺醒して小便をさせても、その間に寢小便をするのであります。また、子供等が晝間劇的な運動のために疲勞しきつて、グツスリ寢込んだ晩などに遺尿することがあるが、これ等も寢小便の部類

ではなく、他で注意をしてやれば、その遺尿を防ぐことが出来るのであります。
妻小児の子供を持つた親は、その汚した夜具の後始末に一方ならぬ苦勞をします。殊に中年者の妻小児は本人が至大の苦惱を感ずる。嫁入の年頃にある娘の妻小児と来ては、そのもの、心の苦しきは、とても想像にも及ばない甚大さであります。
この妻小児を治療するには、頭部と下腹部とへ十分間づ、施術をすればよろしいのであります。
子供の妻小児は、一二回から一週間で治りますが、中年者のは二三週間の見込みで施術することになさるがよい。
寢言、齒ギシリ、夜泣 これ等はいづれも頭部へだけ治療法を行ふのであります。

第廿二類

遊蕩癲治療法

難産癲 産婦人の一大事であり、難産癲の者は、その産期近寄るに随つて、その苦惱は一通りでなく、今度のお産には死にはせぬかなど心痛するのであります。

難産癲ある婦人には、その産期の一週間以前から、施術するとよろしく、施術は頭部と下腹部とへ行ふのであります。
悪阻 つはりは婦人が妊娠の初期に於て起る病氣で、胸苦しくなったり、吐いたりして苦しむものです。そして、酸味を好みます。つはりは頭部と胃部と子宮の上部とへ施術をします。

恐迫觀念 常に恐迫觀念に襲はれて慄むで居る者が、現代に多くあります。施術は頭部だけでよろしいのであります。
赤面癲 人前になると、顔がぼうとして赤くなる、そして心おくれがして、思ひ存分の話が出来ない。といふのが赤面癲であります。

施術は頭部へだけ充分に行へばよろしいのであります。
喫煙癲、飲酒癲 喫煙も飲酒も一度その味を嘗ると、なかくやめられないものであります。

これが治療法は頭部と胃部へ各十分間づ、施術すればよろしいのであります。

遊蕩癲 遊蕩者は自分で遊蕩癲の矯正を願ふやうなれば、もうその遊蕩は自覺的に止めるのでありますから、自身みづからその癲の矯正は依頼しません。

遊蕩癲の矯正は、妻又は親達から依頼するのでありますから、これは遊蕩癲を行ふことになりません。よつて、遊蕩癲は遠隔施術によつて治療してやつて下さい。

第廿三類

記憶力減耗、精力減退、病名不明の病症治療法、陣痛即鎮無療分婉法、しやくり即治法

記憶力減耗 記憶力の減退は、その人の成功不成功の基ともなるのであります。殊に、學生の記憶力減耗は、試験の難關を滿足に通過することが出来ないものであります。

治療法は「記憶力を増進す。」と思念して、頭部へ十五分間施術を行ふ。

精力減退 現代人の生活状態は、心身を過勞し、不衛生を爲すが故に、精力を減退して、早老する者が多いのであります。聖賢法を行つると、精力は日にく旺盛となつてゆきます。そして、いつでも若々しい氣分で活動が出来ることになります。

治療法は、「精力を旺盛ならしむ。」と思念して、頭部、心臓部、胃部、下腹部へ施術するのであります。

病名不明の病症 わが聖賢法は、實は病名を知るの必要なく、唯その症状だけわかれば、それを治療することが出来るのであるといふことは、聖賢法に於て講説したところであり、病名は聖賢法に於ては必要であるが、わが聖賢法に於ては、必ずしも必要ではなく、病名よりも、その實際の症状こそ必要なのであります。ですから、治療の實際に於ては、病名にはその點を下げ、痛みある者には、その痛みを去らしめるの治療を爲せばよろしいのであります。

病名は聖賢法でこそ必要なものであります。聖賢法は病名を定めて後、これに適應する藥物を與へて治療の目的を達せんとするのであります。

るから、病名を定むるといふことが先決であつて、また最も大切なことであります。ですから醫術は病名の定まらざる症状に對して施す術がないのであります。

しかるに、わが靈學療法は病名を定むる必要はなく、その症状さへわかればそれでよろしく、足が揃ければ足の痛みを除き、手が揃えば手を利くやうに、胃腸の機能が盛ればその機能をよくするやうに、腹の中へ瘤が出来たならばその瘤を除くやうに、絶大無限の偉力たる宇宙大靈の力をそこに作用させればよろしいのであつて、實に簡便明瞭且安全な治療法なのであります。

靈學療法は、病名を決定して、それに適應する藥物を與へて治療の目的を達せんとするのでありますから、これを對症療法といふのであります。わが靈學療法は一々異なる病症に對して、各々異なる藥物を使用するといふやうな對症療法でなく、如何なる病症に對しても、唯同一の靈力を作用して治癒せしむるのでありますから、醫術の對症療法に對して、わが靈學療法は絕對療法と申すのであります。

陣痛即鎮無痛分娩法 産婦の陣痛は非常な苦惱であります。これを鎮めるには頭部と下部へ治療法を施行してよろしいのであります。いまや、お産に臨んで居るときですから、この治療は、直接治療よりも産婦に接せずに、同室又は隣室に在つて、遠隔治療を行ふ方が最も適宜でありますから、遠隔治療法に依つて陣痛を鎮め、安らかに分娩せしむるやうにしてください。

しやくり即治法 しやくりは病氣でもなければ癖でもありませんが、また、ある病氣のために起ることもあります。少し位、しやくりをするのなら左程でもないが、一時間二時間とつづいてやるやうでは随分苦しいものです。殊に、しやくりが三日も留まらないと死んで了ふなど、昔からいふてゐることでもあります。しやくりの治療法は、「しやくりをとめる。」と思念して、頭部へ治療法を施せばよろしいのであります。

第三章 修法の實際

これまで、各種靈學療法を講授するに當つて、思念及び治療法等の體験を説述いたしました。尚、茲に、思念及び治療法を修するの實際について詳細に講示いたします。

第一節 思念について

治療法を行ふ初めに當つて「何病を治す。」と思念することを必ず忘れてはならぬと申上げておきましたが、その思念する病氣は、病名がわからなければ唯その症状だけでよいのであります。假令は、手や足の痛む患者を治療する場合、それが神經痛だか、リウマチスだか、その病名がわからぬとも懸念へなく、「手や足の痛みを治す。」と思念して治療法を行へば良ろしく、眼病の場合に於て、それがトラホームであらうが、角膜炎であらうが、白内障であらうが、そんな病名などに頓着なく、唯、「眼の病を治す。」と思念して治療法を行へばよろしいのであります。

若、茲に赤兒が病氣のために苦悶して泣き叫ぶといたしませうか、醫師がこれを診察しても何處が悪いのか判別せず、何病だかわからぬので、隨つて如何なる藥を與へてよいのか、また、如何なる手當をしてよいのか、病と相當がつかず、唯、手擦するより外ない。と、いふ病兒を、わが靈學療法で治療するには「この赤兒の病氣を治す。」と思念して、治療法を行へばそれによろしく、大靈力はその病氣の上に作用し、病氣が癒されるのであります。

第二節 思念についての注意

尚、思念について御注意をいたして置きますが、「何病を治す。」と思念するのであります。「何病を治してやる。」ではないけません。「治してやる。」といふことになると、恩を被せるといふわけ、これは大我でなくて小我、至誠でなくて虚偽であり、公意でなくて私意となります。大慈大悲の願はれが靈力でありますから「何病を治す。」と思念せなければならぬのであります。

す。
それから、施術するに當つて思念し、而して治療秘法を行ふので、治療秘法を行ひ初めたら、再び思念の要なく、その施術して居る際、即ち十分乃至十五分間、重きは二十分乃至三十分間、治療秘法のみを修すればよろしいのであります。

第三節 接 觸 修 法

いま、胃病患者を治療するといはしまするか、まづ、患者に合掌瞑目させ、術者は立式の態度で「必ず治す。」との確信を持ち、患者の頭上へ軽く手掌を當て（又は唯、醫すのみにもよし）ると同時に「胃病を治す。」と思念、直に觸れて治療秘法を一回修し、而して患者を仰臥せしめ、術者は座式の態度を爲して、その患部へ軽く手掌を當て（又は患部の上へ手掌を觸したるのみでもよし）治療秘法を繰り返しく施術時間中行へばよろしいのであります。

それは、かういふ風にやるのです。

「胃病を治す」と思念して、直ぐに

我が精神は健全なり、汝の精神は不健全なり、我今、汝の精神に活力を與へ
汝の精神を健全ならしむ。サブリーム、ヒブリッツ、オブ、ユニバース。サブ
リーム、ヒブリッツオブ、ユニバース。サブリーム、ヒブリッツ、オブ、ユニバ
ース。

これで治療秘法の一廻であります。この一回の治療秘法を修して、仰臥せしめ、それから、右の如く、本文一編に秘文三編の體合に、繰り返しく治療秘法を修するのであります。これで良くお解りになりましたらう。

第四節 不 觸 修 法

患者を臥かして施術する場合には、術者は第一章第三節に示したる座式の態度を採り、片手を患部に置くときは、片手は股の上に稍内向きの角度に置くこと。また、両手を施術に使用するときには、身体を前方に少しく屈するやうになるが、精神大我であれば差支えない。

又、婦人が髪のかたまりがあるとか、或は、髪ついている患者で、頭へ手を觸れぬ方がいと思ふものには、腕へ手を當て、一回の治療秘法を施してよろしい。實は、靈力作能はその身体に接觸するに依つて効果に差異を生ずるものでないのだから、強いて必ずしも患者に手を觸れなくてもよろしいのであります。靈能作用は患者に接觸せず施術を隔てて施術する遠隔治療法が正確に行はれるのでありますから、前記のやうな患者には頭部や患部の上方、一寸なり五寸又は一尺位の所へ術者の手掌を當てて治療秘法を修すればよろしい。然らば、術者の手掌より發現する靈力は直に患者のそのところへ作用を爲すのであります。（巻頭寫眞第三圖、第五圖参照）

また、立式或は座式の態度を採つて、患者の側面又は前面等に在つて患者に接觸せずして施術を爲すことも出来るのであります。

また、患者を椅子に懸けさせて施術してもよろしく、術者が椅子へ懸けて施術してもよろしいのであります。

第五節 乳 兒 治 療 に 就 て

乳兒など施術する場合に、脊に負ぶつて居つたり、又は母が乳を含ませて居つて、乳兒を母より離せば泣く恐れがあるときは、そのまゝにて施術をしてやればよろしい。それが胃腸病であつた場合には、敢て患部に手掌を當てず、反對の背部の方へ手掌を當て、施術すればよろしいのです。靈力は脊部より胃腸部へ透徹作用してその病氣を治します。

この場合、乳児を治療すべく發現作用したる靈力は、乳児を存せしめ又は癒して居つた母の体にも感應するものであります。感應するといふは、どんな風に感ずるのかと申せば、恰度、電氣の感ずるが如くピリ／＼と感應するのであります。

第六節 靈手病を知る

患者が、自己の病名又はその病むところを言はずとも、術者の靈手自ら病氣のあるところに動き、その病氣を治療するものであります。

しかし、未熟の内から、さうは出来ませんが、御熱心に御熱心になれば必ず出来るのであります。この方法は「この者の病氣を治す。」と思念して、最初頭部へ一回治療法を施し、次ぎは、胸、腹の上部へ兩手を置して、一心に治療法を修するのであります。さうする中に、靈手は自から患者の病氣のところへ觸れて、或ひは貼し、或ひは揉み、或ひは擦つて治療を始めるのであります。眞に至妙の作用を現するのであります。

また、患者を座せしめ、或は臥せしめて、靈手を頭部、または背の部、腹の部等へ貼したるまゝ、左の秘法を修すれば、靈手自ら病患部へいたりて吸ひ付くやうになります。

我が精神は健全なり、我今謹み謹みて

大靈の尊に念願し奉る。仰ぎ希くは、この者の病處を知らしめ給へ。

(以上思念して)

「大自由大自在秘法」を熱心に練習し練習し修するのであります。大自由大自在秘法は後にお示し申します。

第七節 病氣の靈覺

患者に、唯、對座したばかりで、または、代人を以て遠隔術を依頼によこした場合に、代人が、未だその病狀を言はない中に、その代人を見たばかりで、その患者の病氣を靈覺することが、幾らもあります。

即ち、あなたは、心臓がわるいとか、胃腸病だとか、腎臓病だとか、神経衰弱とか、または、肺病だとか、子宮病だとか、患者の病を見たりで、術者の心に浮かんでくる。これが靈覺で、必ず違はないのであります。

遠隔術依頼のときも、同様その代人の病を見て、右の如く靈覺が現はれて、患者の病氣を指摘すると適中して居るのであります。この靈覺は誰人にも起るとはいはれませんが、患者を多く接ふて来るか、熱心に修習されれば、靈覺は得られるものでありますから、熱心に修行をお積みなさい。

第八節 病處靈眼に映ず

初めからとはいかないが、だん／＼に修習しなると、施術中にその病處が、靈眼に見えて來ます。心臓とか胃腸とか、肺とかその病める部處が黒く映つて見えます。患者が或一つの病氣の治療を受けに來たとき、その患者に、その他の病氣がある場合に、その病處が靈眼に映じて見えることがあります。その時はその部分も治療してやるのであります。

第九節 邪靈憑依の事

邪靈、生き靈の祟りだとか、または狐やその他の動物が憑依などいふことは、現代人の多くは、そんな事は迷信だと、一概に駁して居るが、それは精神の本體實質を辨へぬ凡夫の愚なる見解に過ぎません。尤も何の靈が憑依などといつても、それが眞實の

靈體現象でなく、その者自らの心的現象たる場合も往々にしてあります。

既に已に講説しました通り、精神は實在であり、精神は作能すべきものであり、また空即是色、精神は現象であり、色即是空、現象は精神であります。

故に肉眼的では、宇宙間の事象は、總て物質的現象の交遊交錯であると思ふが、靈眼を開けば、その總ては精神活動の交遊交錯であります。故に、甲の精神が乙の精神に作能することの可能なるは當然であります。

靈體とは、甲の精神力が乙の精神に作能したのをいふのであつて、何も不思議でもなければ又、毫も否認すべきものでなく、當に有すべき事象なのであります。

靈體の臨に、心身に異状を來した患者は、施術してをりますと、その靈體—生き靈とか死靈とか又は狐狗その他—の姿が、術者の靈眼に映じてまゐりますので、人間の生靈や死靈であれば、問答的に點々と論じてその迷妄を解散することになると、それは除いて了ひます。除けば患者は健康を回復いたします。

また、狐狗や蛇などのついたのであつたら、治療法さへ嚴修すれば夫れ等の邪靈は立ち退いてしまひます。

第四章 治療修法上注意事項

第一節 治療上の注意事項

治療方法が、お分かりになりましたら、これから、治療上についてのいろいろな注意すべき事項をお話申します。

一、服装の事

靈體療法は、一洒一淋の類も用ひず、また、何等の器具を使用せず、唯大靈の御力を手掌より發願して、患者の疾病を治癒し靈脈を矯正するの玄妙にして最も尊貴偉大の治療法であるが、之を知らざる凡夫の患者等は、その何物をも使用せずに治療するを見て、淺慮にも、昔から有り觸れの禁厭や祈禱のやうに誤信し、離つて離んするの恐れがある。それでは救はるゝ靈の患者が大靈の尊に對し奉り程済まぬわけです。ですから術者は患者をしてそのやうな誤信に陥らしめないやうにせねばなりません。それには、威容を正しくして尊嚴を保つといふことが肝要であります。といつて、殊更に威嚴をどるといふことではありません。殊更に威嚴をとるといふことは虚偽であります。傲慢であります。それでは不可せん。自然に尊嚴を保つてなくては……この自然に尊嚴を保つために男子の方は必ず袴を着用して施術をすることにして下さい。

婦人の方は袴はお着けにならなくとも、衣容を端正にして施術することに心がけて下さい。

(第一圖第二圖の立式及座式の寫眞は、この修法聖衣を着用したたのであります。婦人用制服は紋(大靈章)一個で、袖は丸形です。)

男女共、泰山教の制服たる修法聖衣をお着用になるのが一番よろしい

但し、施術以外の用事あつての出先や途中などで急病人などに遇ふた場合には、そのまゝの着衣そのまゝの姿で施術されても差支えはないのであります。

二、淨手の事

さきにも申して置きましたが、施術するに際しては、手を水で洗淨すること。幾人も續けて施術する場合には、一人の施術終れば手を洗淨し、そして次ぎの患者の施術をすること。

三、雑念消滅の事

修練の積まない中は、施術中、小我の精神……觀念等が出たがるものです。そのときには、施術の手を止めないで、施術しながら頭を軽く振ると、小我の精神はヒョイと消えて終ります。しかし頭を振るには、頭を振る氣で振るのではなく、ほんの無意識的に振るのであります。

四、禁慾の事

施術中は大我の精神のみであらねばならぬが、前述の如く、修練の積まぬ中は垂角に小我の精神が出易く、小我の精神はどれでも施術の妨げとなるものであるが、殊に金慾色慾は感應なるものであるから、努めてこれ等の感應感情を出さぬやうにせねばなりません。

五、催睡の事

未熟練の中は、施術中、術者が睡氣を催すことがあります。これは睡魔に襲はるので、そのときは、尚一層懇然に治療秘法を修しなさい。さうすると睡魔は退散し、精神清澄となつて靈力は淡々と強烈に發現いたします。

六、難病劇症に當面したる場合について

秘法の修練者や又は劇症に苦悶する患者を取扱ふ場合に、未修練の中は「こんな難病者や、こんなに劇症に苦悶する大病人は他の方で治療出来るか知ら。」と、不安恐怖の念が出ないとも限らぬ。しかし、不安恐怖は小我であり虚偽精神である。病氣を癒すのは、皆さん方自己の力ではなく、大靈尊の御力に依るのであります。大靈尊の御力は窮大無限のものであります。しかして大我の精神には不安恐怖はありません。ですから、さういふ難病劇症の患者を施術するに當つては、至誠の精神、即ち「必ず治す」との大慈悲心を以て、最も大膽に最も懇然に治療秘法を修してやつて下さい。醫術で數本數十本の注射も効なき劇症でも、わ

が靈學療法を時間を長く修すれば、必ず感應せしむることが出来るのであります。茲に序ながらお話ししておきますが、醫術に於ては御承知の通り、一回分の靈量を、一時に二三回分も與へた場合には、病氣を治す處か、却つて大害を來すといふことがあります。わが靈學療法はそれ等と違ひ、靈力は多く與へればそれだけ多く、疾病の上に靈効を顯はすものであるから、短時間より長時間、一回よりは二回、二回よりは三回と治療法を修した方が、靈効が多く顯はれるわけでありませぬ。

第二節 感應について

靈學療法を施して、患者に如何なる感應が起るかといへば、その者の性格體質又は鈍敏によつて萬人一體ではありませんが、十中八九までは、丁度電氣が感ずるやうだといひます。また、腹の中が動くやうだとか、腹がグウ／＼鳴つて來たとか、或ひはウツ／＼と軽く針で刺されるやうで、しかも心地よくなつて來たとか、又は、しびれて來たとか、又或ひは、苦もなにもなくなり宙に上つて居るやうだとか、患部にズタン／＼と感じて來たとか、實に種々なる感應を呈して參ります。

また、體がフラ／＼と揺られて來たり、合掌したまゝ、靈動を起して來るのこともあります。靈動を起した手で、自己の病處を摩り又、擊つたりするのがあります。その他いろいろの現象もあらはれるのでありますが、又、大體の患者は施術すると體が温かくなつて來たと申します。是れは血液の滯滞が解かれ、その汚濁が浄められ、循環がよくなつて來たのであります。それは生理的觀察で、この現象を精神的に觀察すれば、至誠の精神は即ち温情であつて、温情の通じた結果、温か味を感ずるといふことになつたのであります。温情は慈悲の發露であります。慈即ち至誠の精神……至誠の精神を生命とする泰山數は、この疾病治療の現象に見ましても、純眞なる温情主義であることが立證されるのであります。

施術して居りますと、心地よくなつて眠つてしまふ患者も多くあります。

(初めて施術を受ける患者でも、敏感なのは、頭上へ手を置して数回乃至十回位、治療法を履修して居る中に、合掌又は全身に靈感して、微動或は激動を起して参ります。)

以上は患者のことではありますが、術者が施術中に、身体が浮いたやうになつたり、また身体が揺れて来たり、手や身体に靈動の起つて来ることもあり得ます。或は指先が、しびれたやうになつて来ることもあり得ます。また身体の各所が、ピクッとしたり、全身がボウ

と温かくなつて参ります。患者の中の敏感なものや又は重病者などは、一回位で感應がわからないのがありますが、二回三回と施術をする中には、感應がわかつて参ります。稀には、極端感で数回施術しても感應のないのがあります。しかし、患者に感應が分らなくても病氣そのものは治つて行くのであります。

これは、何故であるかと申せば、感應は患者の精神現象であつて、術者より發現する靈力は精神を超越したる偉大の作用を爲すものでありますから、それが患者そのものの精神に感知すると否とによつて、靈能作用には更に差違を生ずることなく、靈力の發動は患者の疾患治療の上に作用するものであるからであります。

この敏感に關することは、自己治療の場合に於ても亦、同様なのであります。しかし感應の有無又はその程度を患者に聞き訊くのは、興味もあることだし、また参考にもなることであるから聞くのもよろしいが、敏感の患者は、感應がないと靈効即ち病氣が治らぬものかとの誤解を起さぬとも限らぬから、その邊はよく御注意を願ひたい。

また、御参考までに申し上げておきますが、齒痛患者を施術すると、却つて痛みは烈しくなつて堪え得られないといふやうになるのが稀にはあります。しかしそれは大靈力のために、病氣が苦痛を感じる状態なので、施術終れば、間もなく齒痛が拭ふたやうに癒つて終ふのであります。

第三節 慢性病患者施術について

慢性病患者を二三日施術しますると「どうも身体がだるくなつて来ました」とか、又は「こんなところが否しくなつて来ました」とかいうて、思ひがけないところに異状を呈するものが往々あります。

それは、長き間固定したる病根に、この治療法によつて靈力が作用したる結果であつて、即ち靈敏の顯はれたものであります。術者の靈能が患者の病根に斧鉞を加へた爲に、その病根がゆるぎ出したから、この施術を受ける前の容態とは懸つた現象があらはれて来たのであつて、施術前と同じ容態であるならば、それはまだ靈効が顯はれないのであります。

患者への注意

ですから、このやうな現象の起つたのは、漸に悦ぶべき事ではありますが、この理を覺らぬ患者等は、施術を受けたために却つて身体の方が悪くなつたと、誤解する恐れがありますから、慢性病患者を施術する當初に於て、豫め右の趣きを患者に聞かせおき、「さういふ異状が起れば、決して心配することはない。固まつた病根が此の治療法のために、散つて来たので、それは治りかけた證據であるから、喜んで御禮を言はせて下さい」と、説き聞かせて置くことが肝要であります。さうでないといふ患者はその理を知らぬのであるから、折角、靈効が顯はれて来たのに、中止をするやうなことになる、患者の不利益ばかりでなく、また、術者の信用にも關することであり得ますから、慢性病患者を取扱ふ當初に於て、右の事をお忘れないうやうになさるべきではありません。而も初回施術のときに、既にさういふ状態を呈するものもありますから。

病毒の分解

しかも、患者が斯ういふやうに身体がだるいといふ現象を呈ししても、それは普通のだるいのと違ひ、何となく氣分がよくて

居て、それでたる味を感じるので、普通のたるさとは全く違ひ、少しの苦しきもないのであります。そして、斯ういふ現象を呈して來ますと、固定した痼疾が分解を初めたのであります。その痼疾は大便秘に凝じて體外に排泄されますので、大便秘の色は變つて參ります。大便の色は黒くなり、小便は茶色を呈します。ですから、このことも亦、豫め患者に聞かして置くのもよろしい事です。

小便の色が變るといふことをお話しした序に、お話しして置くことがあります。それは御承知の通り、体熱ある時に於ての尿は茶色を呈するものであります。この治療法によりますと、体温は平熱であつても茶色の小便が出て來ることがあります。それは、今申す通り、この治療法の施行によつて、体内の痼疾が小便に凝じて排泄されるのであります。また、施術中、患者の體から、異様の臭氣を發散するのがあります。これは、氣孔から痼疾が外部へ發散するのであります。

靈力は全身に作能す

また「患部以外の處に苦痛が起つて來た。」といふのがあります。それは、其の患者の既往に於て、即ち數年又はそれ以前に於て曾て病むであつたところで、その時は治つたと思ふて居つたが、實は全癒したのではなく、一時痼疾が衰へただけで、その痼根が變つて居つたからです。ところが、今度の他の痼疾のために施術を受けに來た、しかるに、本療法はその靈力が、唯一患部ばかりでなく、全身にも作能するのであるから、古く潜める痼根も、大靈の力に擲起され、即ち痼疾は居塔らなくなつて顯はれて來るのであります。ですから、或一つの痼疾の治療を受けに來ても、その痼氣ばかり治るのではなく、患者が無言で居ても、他の痼氣も共に癒され、大喜びをした實際はいくらもあります。大靈の力は生命體を靈化するの作能を爲すものであります。そして生命體なるものは精神と物質より組成されたものであります。しかし、實は心身一如、物心即一なのであります。

心 肉 共 濟

ですから、所謂、肉體疾患を治療しますると、その者の精神も淨化されて來るのであり、また、心的疾患を治療すると肉體も健全になつて來るは理の當然であります。いま、一二の實例を御參考までにお話しませう。或中學生徒でありましたが、毎晩小便をするので、寄宿舎へ入れたのだが、その爲に入れぬ事ができないうで困つて居るからとて、その親が生徒をつれて治療をたのみに來た。モウ年頃になつての痼小使であるから、私は十日間位はかゝるだらうといつて、その日に施術してやつたところが、唯一回の施術が卓効あつて、その晩からビタと痼小使をしなくなつた。それでも六日ほど續いて施術を受けに來たが、初回の施術以來、全く治つたので「君はモウ明日から來なくともいい、立派に治つたのだから。」といつたところ、翌日來て「父親が申すには、先生は十日間位の見込みだといはれたのだから、お見込み通り、十日間は非難つて施術して貰へ、とのことですから、參りました。」と、父子共に私の施術を請ふの熱心なものですから、尙續いて施術をして翌り九日目に、私は「君が私の施術を受けるやうになつてから、學校の學科で良く出来るやうになつたのはないかね。」と、問ふたところ「あります。私は英語が成績が悪く嫌いであつたのですが、先生の施術を受けるやうになつてからは、嫌いな英語が好きになり、大層うまく出来るやうになりました。」と、答へたことがありました。

また、醫藥効なき皮膚病と顔面の痣とで苦悶して居つた或婦人患者を、一週間ばかり施術してから、或日「あなたは、この頃、私の施術を受けるやうになつてから、心持に變りはありませんか。」と、問ふたところ婦人は「心は清々となり、いつも神樂が私を見て居らるゝやうな氣がして、少しでも曲つた心を出したり、悪いことなど全く出来なくなりました。」と、答へたのであります。これ即ち心身一如の原理に基づくのであります。

第四節 施術期間について

御修練が積みまると患者と應對して居る中に、又は患者を一寸見たばかりで、この患者は、何日位又は何回の施術で治るといふことが、靈覺によつて分かりますが、それほどでなくとも、之から、患者に數をかけて來なざると、施術期間に就て大凡の見込みがついて参ります。

しかし、その見込みが適中しないと不信を擡ぐ基となりますから、その期間は見込みより長くいふ方がよい。二三日で治らうと思ふのは、五日位に、一週間で治らうと思ふのは十日位と、かういふやうに、見込みより少し長期にいうて置く、そして、その期間内に全治すれば患者は喜ぶし、若一週間というて、一週間に治らなかつた場合には、患者は失望するばかりか、術者の不信ともなる。しかも、一週間の施術で多少なり靈覺が顯はれて來て、モウ三四日も施術すれば全快するといふやうになつたのに、初めいふた一週間で全快とまでに至らなかつた爲に患者が受療を中止するやうなことがあつては、折角救ひ得べき患者を救ふことが出来ず、眞に遺憾千萬なことであるから、その見込み期間は少し長くいつておく方がよろしいのであります。

又御參考までにお話申し上げます。慢性癲患者が一週間の治療を受け、少し効驗が顯はれて來たのに、患者が已むなき事情のために中止したに拘はらず、その後、漸次快方に向ひ遂に全快したといふ例も少くありませんが、これは一週間施術したる治療靈能が、その後で連續して作用したる結果であります。

第五節 濫施を戒しむ

施術を受くることを忌み嫌ふ者に、こちらから「どうか、施術さして下さい。」と、いふやうに懇願的にやつてはいけません。そんな卑屈な心には、靈力は發顯しないものであります。また、「一寸試しにやつて見てくれ。」などと、何か玩弄物のやうに思ふものにも、施法せないやうになさい。大靈の力は至上至尊のものであります。ですから、これを玩弄し、濫施すべきものではないのであります。

しかし、本人が知らずとも、ア、氣の毒だと思ふ患者がありましたなれば、その當人に知らせずに、治療法を修して治してやることは、洵によろしいことであります。それには遠隔治療法を修して治すのであります。

假令ば、自分の乗つて居る汽車の乗客中に、知らぬ他人が汽車に附ふたとか、煤煙が眼に入つたとか、又はその他の病氣で苦しんで居るのを見た場合に、應を隔て、腰をかけて居りながら、その本人に知らせずして、遠隔施術を以て施してやる。この場合、當人はこちらで遠隔治療法を行つたことを知らないのだから、その苦痛が除け、病氣が回復したのは、自然に臨つたのであると思ふ。しかし、當人は何と思ふてもそれは構はぬ。ただ、他人の苦痛を除いてやつた自分こそ、眞に快心の喜びを得るのであります。

第六節 座式施術について

平素、座り馴れない方や、洋服を着て居る場合に施術するとき、長く座つて施術するのが苦痛であるならば、胡座でやつてもよろしいのであります。胡座は左足を内に、右足を外にして稍重ねたる態度が、最も安樂な方法であります。

第七節 縁なき衆生度し難し

凡そ、宇宙事象は、總て因縁によつて繋がる。聖者、佛祖釋迦は、縁なき衆生度し難し。と申されたが、實にその通りであります。悟覺には古今もなく、東西もない。時處を超越したる大靈の道の悟覺には、三千年の昔も、三千年後の今日も、何の變りもなく、離の印度と、東の日本とによつて些毫の異なるなく、釋迦と泰山と少しも靈ふ等はない。で、私も釋迦と同じく、縁なきの衆生は、濟ひ難いと申すのであります。唯、申すのではありません。長き間の私の體験が之を立證するのであります。

越後長岡の金井といふ方は、私が長岡へ巡錫の都度、入門したい／＼と、切りに寝んで居られたが、種々の事故のために入門の機會を得ず、四年目に漸くその望みを果して非常に喜ばれた。かういふ人もあるかと思ふと、また、泰山數の聖教たるを聞くや、そ

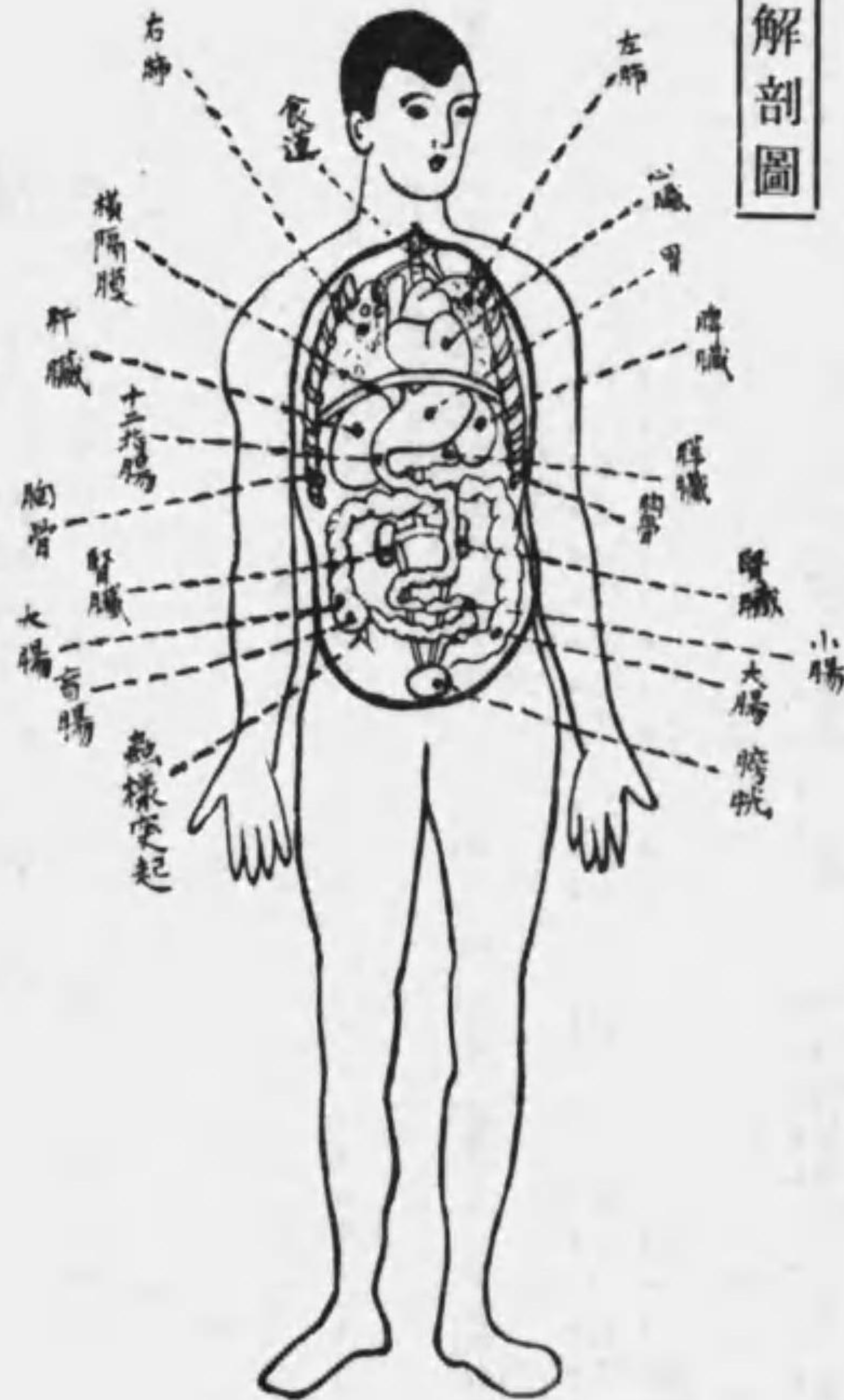
の日に入門を願ひ出る人もあり、聖教たるを良く承知してをり乍ら、何年たつても講授を受けやうとの志の起らない者もあり、他から頼りとすゝめられても入門せぬ人もあれば、誰にすゝめられなくとも、自ら進んで入門する人もあり、この國に併り乍ら、この教へをうけやうともしない者があるかと思ふと、遠國から遙々來つて入門を願ひ出る人もある。または、授けてやり度いなと思ふのに、授かり度いなと思ふ氣色の少しもない者もあるといふ風に、病める患者も同じこと、遠地から見ず識らずの人が、遠隔施術を依頼してよこし、ために救はれて、醫藥に見放され長年苦しんだ痼疾が全快し、無上の歡喜に感泣してをるものもあれば、直近所に居つて、この靈藥療法なら、二三回位の施術で快癒する位の痼疾にかゝり乍ら、施術を依頼せんとせず、長く醫藥を用ひて治りもせず苦しむつゝあるものもあります。

生因緣濟度無生因緣難濟度

斯くの如く、因緣の生じたる者は光明を得るも、親子兄弟でも因緣の發生せざるに於ては、濟度難いものであります。そして、因緣は、きのふまで發生せず今日になつて發生するものあれば、また、折角發生したる因緣も、輕薄くして消えるものもあります。即ち、昨日までは、施術を受けるを望まない者が、今日となつて、靈藥療法の施術を乞ふものあれば、既に施術を受けて、痼疾が漸く快方に起つて、尙一週間か十日位も繼續すれば必ず全癒すべきものが、他の誘惑に迷はさるゝか、又は種々なる事情の爲に惜しい處で中止し、輕薄くして救はれ切れぬ者もあります。

昔、これ因緣の然らしむるところ、皆さん方、よくお心得おきを願ひます。凡夫等は、偉大なる大靈の力であるならば、萬物同時に濟はるべきであらうと思ふが、決してさうではない。凡夫等のかういふ淺薄な考へは、久遠よりの暇因緣結果の累積錯綜したる事象、即ち因緣てふ實在本質を理解せざるより生ずるのであります。

人體解剖圖



終りに申上げて置きます、泰山靈力靈驗録や「靈光」誌を時折御覽になることは、非常に有益であります。同書には、門生諸賢が諸種の痼疾を治癒したる實驗報告が満載されてありますから、御參考になる斗りか、治療上に於ける確信が強くなつて參ります。

(靈力顯現活用篇の一)終

第十四講 靈力顯現活用篇の二 秘法

第一章 遠隔治療法

遠隔治療法とは、遠地に在る重病患者懸難者にして来院の上、親しく治療を受ける事が出来ないとか、または、在地の遠近を問はず、何等かの事情のために直接治療を受け得ざる患者懸難者に對して行ふところの治療法であります。

世の精神療法家中には、遠隔治療を行ふといふのがあります。しかし、それ等の遠隔治療法は大概患者に種々なる條件をつけて居ります。即ちその條件を厳守してこそ初めて効果があるので、若守らなかつたならば更に効果はないのであります。尙詳しく申せば、術者と患者との精神の一致によつてのみ有効なので、一致しない場合には何等の効果も現はれません。ですから、患者が術者を信ぜざる場合には寸効もないのであります。

故にそれ等の遠隔治療法は、不信者やまたは信念を起し得ざる幼弱者、白痴、癲癩、精神病者、昏睡状態にある者、老弱者、或は癡正を欲せざる、酒癖、放蕩癖其他の懸難者には施す術がないのであります。

わが泰山教の靈學療法に於ける遠隔治療法は、それ等精神療法家の爲す、對手の精神を基礎とする上に於てのみ行はるゝ相対的遠隔治療法ではなく、相手の精神の如何を問はず施術して効果を奏する絶対性遠隔治療法であります。ですから、わが、遠隔治療法に於ては、對手の信、不信、識、不識を問はず自由に施術し得るのであります。これ、泰山教に於ける靈學療法は、精神を超越し且つ精神を支配する、大靈力の發動作能に依

るからであつて 世にある多くの精神療法と全然その根元を異にする所以を立證するものであります。

第一節 遠隔治療法の實際

さて、これから治療法の實際を傳授いたします。

寫眞なれば、半身寫し、全身寫し、靴古何れでもよく、また他人と一しよに撮つたでもよろしい。

寫眞のない者は、唯その、住所姓名年齢籍貫等を、半紙八ツ切のものに記したものを携ひる。姓名を中央に、住所を右側に、年齢を左側に、病名又は病状を姓名の上部に記すのであります。

まづ、机の上に寫眞を置き、術者は座式の態度を探り、その寫眞の顔を見詰め乍ら「何病を治す」と思念し、直に、左手を寫眞の上におき、左手の上に右手を重ね眼目結口して、左の治療法を十五分乃至二十分間行ふ。

寫眞なき患者は、前記の如く記したる紙片を机上におき、その紙片を凝視し乍ら「何處、何某、何歳何病を治す」と思念し、寫眞の場合と同じく、左右の手を重ねてその上に載せ、眼目結口して左の治療法を十五分乃至二十分間行ふ。

治療秘法

我が精神は健全なり、汝の精神は不健全なり、我れ
今、汝の精神に活力を與へ、汝の精神を健全ならしむ。

サブリーム、ヒプノリッツ、オブ、ユニバーズ。

以上の治療法は直接治療のときと同じく、本文一遍に秘文三遍の唱合に繰返しくその時間中修法するのであります。遠隔施術中、術者に起る靈感は、直接施術の場合と同様であります。

第二節 遠隔治療法の原理

術者の手掌より靈力が發射すると、幾百千里の遙くに居る患者の體に、分秒を俟たず靈力は感應し、その疾病治療に作能するのであります。この理は、靈の題目下に於て詳細に説明せしが如く、靈には時間も空間もないのであるから、實に靈には、何時間とか何里とかといふものがないのであります。遠隔施術と申すと、遠いといふ、空間の觀念がありません。そして、遠いところへ靈力が通ずるといふやうに思考されます。しかし、それは靈の眞相を知らぬ一般の人々に、分かり易からしめんがためにつけた名稱であつて、靈の本体から見れば、遠隔でもなく、近接でもないものであつて、靈能にはもとより時間空間がないのであります。患者が何か作能して居つても、又旅行中であつても、術者の施術する時を知らずに居つても、或は就眠中であつても、術者が遠隔施術を修すると、直に患者に靈力は作能して、氣血は癒さるゝのであります。しかし、右の如き場合に於ては、感應性の靈敏なる者には、作能中に在つても、よく靈感を意識するが、否らざるものには意識されない。意識されないから靈効がないかといへば、決してさうではなく、意識さるゝと否とに拘はらず靈効は顯はるゝのであります。

第三節 靈感の時間

靈感を識りたいと望むものには、その時刻を約束して施術するといふ。この場合に於ては、術者と患者の時計の時針を正確に合は

せて置かねばなりません。(注意、遠地では時間の差がありますから御注意下さい。假令は、東京と瀋陽と靈應とでは一時間の差があり、米國と日本では十二時間の差があるやうに、各遠地に於ける時差を考慮して、相互の時針を正確にせねばなりません。)そして施術開始の時間直前に、患者は静室に在つて、その施術時間中端座瞑目合掌すべきことを忘れざるやう患者に注意しておくことになさい。かくして、術者が約束の時間に施術開始すると、分秒の差なく、直に遠地に在る患者に感應し、その施術時間中、(初め施術時間を約束し置く、假令ば十五分間とか二十分間とか)は間断なく感應するものであります。(巻頭寫眞第七圖、第八圖参照)

第四節 遠隔施術の實驗

遠隔施術は正確なるもので、直接施術と同じ靈効を顯はすことは、更に疑ふの要なく玄妙なる靈理の然らしむるところなることは、既に業に御理解になつて居る筈であります。初學の皆さん方には、實驗の上ならば御確信が生じますまい。ついでには、一人の患者に直接親療を施して、その靈感の如何を聞き、更に該患者を別室に在らしめて、今度は、その患者に遠隔治療法を行つて御覽なさい。そして、施術後その患者に靈感の模様を訊いて御覽なさい。必ず直接親療と同じ感應があつたといひます。實驗して見なければ確信が起らぬものですから、ドシ／＼御實驗なさい。

第五節 施術後の靈感持續

左に掲ぐる二つの事は直接及び遠隔施術ともに共通の現象であります。御参考までにお話申しておきます。

一、施術後靈感持續のこと

施術を終つて後尙數分乃至數十分間又は數時間も過えず患者に靈感の持續してゐることがあります。これは、施術中に作能した靈力の持續的活動であります。

一、施術期間後著効のこと

假令ば、一週間とか十日間の見込みを以て或患者を施術したとしますか、その見込みの期間中に靈効が思ふほどに顯はれないところが、その後には、靈驗日々には顯はれて全治したと喜んで居る實例も少くありません。これは、その施術期間中、靈力は患者の体内に作用して居るのですが、未だそれが病的細胞を破壊するまでに達せなかつたのであるが、期間後も靈能は間斷なく、痼疾と闘つて遂にこれを屈服せしめたものであります。

尙術修練ならぬ中は、遠隔施術は直接施術の時より、比較的小我の精神が出易い傾向がありますから、成るべく時間をながく行ふことになさるがよい。二十分間施術されても、その間に小我の精神が十分間、妨げをなせば、差半十分間だけしか、眞に靈力は作能しない體であります。

第六節 死生の靈覺

直接施術の時も、遠隔施術の時も同じであります。その天命の來てを即ち生は盡きて、死の迫つてをるは靈力がその患者の身體に入りません。遠隔施術では、その寫眞又は施術家（患者の姓名を記した紙札）の上に置く手が跳返さるゝやうになります。術者の手掌から出る靈力が、未だ死の顯はれざる患者であつたならば、その身體なり寫眞なりへズン／＼と通つて行くのですが、もう命數のない患者には、なかく通らないで、術者の手はづむやうになります。顯る前態で醫師の診察では死ぬといふ患者でも、わが靈療法の実施によつて、靈力が透徹するやうなれば、その患者は斷じて死なないのであります。また、これと反對に、醫師が大丈夫といふ患者でも、靈力が通透せぬ患者であれば必ず死ぬと斷じて間違ひありません。

また、施術中にその病者の死を靈覺することもあります。靈覺とは、心に浮かんで來るのであります。

自己治療法

自己治療法……これは申し上げるまでもなく、その文字の示す如く、自己の痼疾を治療修正するの秘法であります。

治療秘法

我が精神は健全なり、我れ今、我が精神に活力を
與へ、我が精神を健全ならしむ。 (本文)

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。 (秘文)

(本文の解釋)

我が精神は健全なり

これは大我の精神を申すのであります。

我れ今、我が精神に活力を與へ

我れ今、我が精神に、この我が精神は小我の精神を指すのであります。活力を與へとは、大活生命力……

大靈厚の力を與ふることあります。

我が精神を健全ならしむ

これは、大靈力を與へ以て痼疾を驅滅し、小我の精神を除き、健全なる大我の精神にならしむといふことで、即ち病氣を治し健康

体にするといふ感でありませぬ。

サブリーム、ヒプリッツ、オズ、ユニバーズ。

この秘文の意義は、他人治療法のところでも説明しておきましたから、御承知のことでもあります。

第一節 自己治療法の實際

これから、自己治療法についての實際を傳授いたします。
自己治療法を修するには、梅など着用品を要せず、普通着衣のままにて宜しく、もしまた、肩に入つて居る時、腹筋でもしたら、そこで其儘の態度で治療すればよく、臨時隨處で修法が出来るのであります。
また、座式や立式の態度で行つてもよし、臥して居て修法しても、それは自由であります。しかして又、患部へ手を當てて行つてもよし、當てずに行つてもよいので、その靈感効驗は同じであります。

ただ、夜分、寢床に入つてから、自己治療をやりますと、萬人が萬人、五分間も修法すると心地よくなつて来て、知らず眠りに陥つて了ひます。五分間位で寝入つてしまつたならば、即ち五分間しか靈力は作能しなかつたことになりませぬから、就寝前に治療するときは寢床の側で、十五分なり二十分なり修法してから、床に入るやうにするがよろしいのです。

自己治療は遠隔治療と同じく、小我の精神が多く出やすいから、なるべく時間を長くやるやうになさるがよろしい。

治療の方法は「何病を治す。」とか「何癢を矯正す。」と自己の病癢を思念して、前掲の自己治療秘法、秘文、一頁に秘文三遍の割合に繰返し々々修法するのであります。

第二節 如何なる難病痼疾も快癒す

御熱心に修術なさい。如何なる自己の難病痼疾も必ず快癒することが出来ます。

數年前のことであつたが、新潟縣の江口といふ人が入門されましたが、この人は永年心臓病で舌しみ、長岡や新潟の某博士や學士等の診察を受けて居つたが、少しも効がなく、醫師等は遂に「これは心臓にヒビが入つたのだから、死なねばならぬ」と、死の宣告を與へられ、それから、神佛に祈願したり、その他殆ど有とあらゆる手段方法を講じたが、一向によくならないで本人は勿論、家族一同悲歎に暮つたのです。この人が、私の講授を受けて卒業した晩、歸宅後夜中、熱心も熱心、三時間の長きに亘つて、一心に自己治療法を修したところ、何うです……ケロリと治つて、日に「元氣が付き、体力も増して、何んな活動でも出来るやうになつて、今も處んに働いて居られます。

かういふ實際もあるのですから、皆さん御熱心におやんなさい。

第三節 疲勞即治法

また、勞働をして疲勞を來したときなどは「疲勞を治す」と思念して、十分間も自己治療法を修すると、忽ち、その疲勞は消えて元氣旺盛、心身輕快となりますから、何仕事をやつても、二人前位の能率を擧げることは、隨に出来るのであります。

それから、申上げなくともお分かりになつて居らうと思ひますが、思念は、他人治療の時と同じく、初め一度だけ思念し、その後、ただ治療法だけを繰返し々々行へばよろしいのであります。

第四節 即時安眠自由法

不眠症又は常に安眠の出来ない人は、臥床へ入つて、「安眠する」と思念して自己治療法を修して居ると、いつの間にか熟睡に入り容易に安眠が出来ますから、直に實行なさるがよろしい。

第五節 参考事項

他人及び自己共同じことですが如何なる病氣でも、經直に治療すれば二回で治りますが、慢性となりますと、數回又は數十回の治療を要することになります。本靈療法は、數回又は數十回醫藥其他種々なる治療法を施しても尙癒らなかつた難症痼疾も、數週間又は數ヶ月の治療によつて完全に治療した實例を有するのでありまして、如何なる難症でもなほるといふ確信があるのです。

醫藥では一生治らないといふ難症も、靈療法を長期間治療すれば、必ず治し得るのでありますから、醫藥療法で一週間で必ず治るといふ病氣ならば、わが靈療法では、暫つて、一二次の治療で治し得るのであります。これ等のことについての實例は、靈山靈力靈驗録に掲載されてありますから御覽を願ひたい。

又、靈療法に於て、自癒し得ざる者は他療の資糧なし。と、申して置きましたが、この意味は、自己の病氣が全癒せぬ中は他人の病氣を治療することが出来ぬといふものではありません。前述の如く病氣の悪いのは自己共にその全癒までは長期間を要するのでありますから、病氣の悪い方は自己の病氣が全癒するまでは、假令、家族に病人が出来てもそれを治療してはならぬものと誤解してはいけません。未だ自分の病氣が全癒に至らずとも、既に御體得になつた、大靈力は隨時隨處に於て御現なされ、病苦者を一人でも多くお救ひを願ひたい。しかも、他の病苦を除くといふことは即ち善因であつて、それに對比するだけの自己の罪業は減滅されるのであります。

第六節 輕症の如き重病

それから、患者の中に「私の病氣は一寸したので寢て居るほどではないのですが、どうも年中はつきりせないで困つて居ります。是までいろいろの事をやつて見たのですが、何うもしつかりとしないで困ります。」と、かういふのがあります。これはふら／＼病

とでもいふので、臥床するほどではなくとも、しかも、年中、充分の働きも出来ず、毎日ふら／＼と空しく日を送つて居る者であつて、かういふ病人は、外見重態でなくとも、實は重患者であつて、罪惡の最も重いものであります。自分は殊更に難いやうなことをいうて居るが、眞實に難いのなら、藥を一週間も服めば治る筈なのに、年中、薬づけになつて居ても治らないのであるから、かういふのは、前世の罪業がその因を成したので、随つて靈療法を長く施さねばならぬのであります。

中風その他の病氣にも、現世的のと前世の遺傳的のとあります。遺傳や又は前世因成による病氣は、その根元が深くあるのですから、何れも長き期間の治療を要するのでありますから、患者に接したる靈師に於て、それ等の病氣を靈察し、それ／＼治療期間の見込みを付けるやうになさるがよろしいです。

以上の事柄は、他人の病氣についてのみでなく、自分の病氣についても亦、同様であります。

第七節 人の心は二様に働く

これまでの門人の中で、誤解をなすつた方が一人ありましたから、皆さん方に特に説明しておくことがあります。

それは、自己治療法を行う場合に、自分は未だ病身なるに我が精神は健全なりと、いふのは何うか、との疑念であります。

然し、それは誤解であります。既に「宇宙大靈の現はれが我である」と悟つた我は、これ健全であります。病氣は不健全なる精神で不健全我であります。故に、悟入したる我の叫びは、即ち、大靈の叫びであるのです。人の心は二様に働くもので、即ち本性と、假性と働いてをります。本性とは、靈性であり、至誠の精神であります。假性とは凡性であり、虚偽精神であります。虚偽精神は即ち病念であつて、これ本性でなく假性であります。尙詳しく申せば、人間本然の精神は至誠の精神であるが故に病氣などあらう筈はない。しかるに、この本然の精神の外に虚偽精神を働かすから、病氣を生ずる。人間はその本性にのみ生きればよろしいのですが、假性をはたらかすから、病氣が發生する。實に病體は人間生活には餘計なものであります。この餘計な病體は寸時もはやく滅せねばならぬ。

その誤解した方は、病體(假性)が、本然の我であると思ふたから不可ない。本然の我は病體でなくて、病體を滅盡するところの

偉大なる能力、即ち悟我、大我、宇宙大精神である。
無大無限の作能を現する宇宙大精神、宇宙大靈の偉力を以て、努めて疑念を除却滅盡し、以て、靈の影だになき光明體とならねばならぬのであります。

第二章 靈 通 法

第一節 神通力發顯法

靈通法、又の名、神通力發顯法とも申します。この秘法は、靈力を發現して、その發現したる靈力を、物質を通じて他人に靈感
を興へ、又は、空間を隔て、他人に通ずるの秘法であります。

第二節 靈通法の實際

これから、靈通法の實際を傳授いたします。
まづ、机に向つて座式態度を探り、右手を机の一端に置き、左手は左の股の上におく（左の手を机の上におくときは、右手を右
股の上におく）、對手の者は、机を挟んで自分と對面せしめ、その手を反對の一端におかしめる。而して「相手の手をしびれ
さす。」又は「何某（相手の姓名）の手をしびれさす。」と、思念して、左の大自然秘法を行ふ。

第三節 大自然自在秘法

この、大自然自在秘法は、靈通法ばかりでなく、この後、御傳授する種々なる靈術靈法等に、活用する機会が多々ありますから、よく御記憶おきを願ひたい。

我が精神は健全なり、故に我れは大自然にして大自然なり。（本文）

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。（秘文）

右の秘法を本文一に秘文三の場合に繰返しく修法すると、忽ち靈力は發動して、手頭よりピリ／＼と發現し、發現する
と同時に、分秒の間もなく、忽ち相手の指先にピリ／＼と靈感し、次第に腕の方へ感應し、その指先はしびれて参ります。
また、相手の数尺乃至數間の距離に在らしめ、右手又は左手を挙げしめ、或は合掌せしめ、術者は座式（又は立式でもよし）の態
度を探り、右手（又は左手）を相手の方へ向け「相手の手をしびれさす。」と、思念して右の秘法を修すると、術者の手頭よ
り發現する靈力は、忽ち相手の手へ感應する。更に對手を隣室又は數室を隔てたる處に在らしめて、唯座式のまゝにてか、又は手を
その方に向け（或は反對の方角、また、天井の方に向けてもよし）前記の如く修法すると、術者より發現する靈力は、實に分秒の差
もなく、忽ち相手に感應するのであります。

第四節 大靈尊の照明

この場合、相手は、どの室のどの處に、どちら向きに居つたかは、術者は知らず、その肉眼で認識することが出来ないものであるが
宇宙大靈尊は、宇宙間の一切を知ろしめすところの大照曜であるが故に、術者より發現したる大靈力は、相手の所在を照瞭し、
そこに作能するのであります。

何千里にも分秒の差なし

何十里、何百千里遠地に在る者に對し、時間を約して、右の實驗をして御覽なさい。同室内に於ける實驗と同じく、一秒の差もなく、對手に靈感せしむることが出来るのであります。
大靈尊の御力は、眞に至妙至妙のものであります。

これ程の眞實はなし

靈感について一言申しておくことがあります。それは、ビリ／＼と電氣の如く感じないものには、指の筋々がキタン／＼と動いて来るか、脈を打つやうに感じて来るものもあり、また、指頭にムジ／＼と感じて来たり、或は合掌の中へ、ムラ／＼と風が起つて来ることもあります。
對手が變ら、反撥心を起しても駄目です。術者から靈力が發散すると、對手には必ず感應するのです。發散する靈力は術者自身が分かるのであるから、發散するや對手に「感應があつたらう。」と、確信を以て言ふことが出来るのであります。これほどの眞實はありません。ですから、假令、對手が「感じません。」などと嘘をいうても駄目であります。

第五節 鈍感と敏感の辯

繼に、治療法のところで、人に鈍感と敏感とあることをお話いたしました置きましたが、こゝにもまた、之についてお話申すことがあります。
性來鈍感の人は、この學術を修得し、自身靈力を發現しつゝあるに拘はらず、自分でその靈感が明瞭に分らない。ところが、その人が靈通法を修すると、對手の者には良く靈力の感應するの分かる。自分では、さう深山に靈力が出て居るまいと思ふても、對手には強く感じてゐる。さういふわけで、この靈通法を修すれば、必ず靈力は發現して、對手に作能するのでありますから、鈍感

の術者は自分に感じが無いから、對手にも感應が少いと思ふは、大なる誤りであります。

このことは、常に靈通法を修したときばかりでなく、治療法を修する場合に於ても同じことで、鈍感なる術者が、自分には大した靈感もないのに、患者には強烈に感應しつゝあるのであります。それは、施術したとき、その患者に靈感の狀態を聞いて見るとよくわかります。鈍感な術者と雖も、熱心に修法を行すると、靈力は必ず強烈に發現作用するのでありますから、決して悲觀するに及びません。
右は鈍感者のために御注意まで申上げて置きます。

x x x x x x

第六節 神通力即時顯現

さあ、この靈通法は、頗る簡易な秘法修行によつて、大靈力を發現するところの方法でありますから、皆さん方は直に之が御實驗をなさい。
皆さん方一人づつ對手を定めて、机の兩側に對座し、相互に、受ける方になり又通する方（修法者）になつて、お互に實驗し合ふて御覽なさい。そして、机での實驗が済むたら、空間を隔てての靈通法の御實驗をなさい。それから、皆さん方の中には、未だ、この秘法の暗記の出来ない方がありませうから、その方は、秘法を御筆記になつたそのノートを、机上に置いて、眼だけを細く開いて、ノートを見ながら、前に示した通りの順序方法によつて御覽なされるがよろしい。
勿論、口も舌も咽喉も動かさず、又、殊更に力を入れず、唯、自然にして、大我の精神の中に、秘法（本文、秘文）を叫ぶのであります。
皆さん出来ましたか………なんですつて………さういふふうに、御自身から、偉大神祕の靈力が發現したのは、洵に不思議ですつて

不思議に非ずして妙

不思議……不可せんね。宇宙間に不思議なし、泰山教の明鏡に映る宇宙一切現象に、不可思議なるものは一つもない。とは、曾て説明したところでもあります。只今、皆さん方が實驗なされた靈力發現に於ける現象は、決して不可思議でなく、唯、玄妙といふの外ないのであります。

斯くの如く、凡夫の望んで容易に得べからざる、偉大神秘の靈力を、皆さん方は正に獲得し、それを只今顯現されたのであります。而して、靈力を獲得顯現し、無限の法悦に浴せらるゝに至つたのは、畢竟、皆さん方が、毎日御熱心に、秘の講授を受け、泰山教を御信託になつた、御熱誠の賜ものであります。

ついでには、益々靈性を研磨せられ、靈力を強大に發現し、以て、衆生濟度に努力せられんことを切望いたします。

(附言) 本講授録は、講授會に於て、院長泰山教祖が、親しく講授されたそのまゝの記録であります。依つて、前記の靈通法の實驗記録は、講授會に於て、門生諸賢に對し、教祖親からの講述指導に關する實際の叙述記でありますから、親授を受けず、本講授録によつて、修得された方は、家族なり、友人なりを被實驗者(受ける方)となされ、その人に對つて御實驗をなさるがよろしいのであります。

本講授録を精讀心讀、即ち誠意を以てお讀みなつた方は既に、泰山教の教理を會得され、宇宙の眞理及び大法則を理解し、徹頭徹尾、虚偽精神を去り、至誠の精神を以て生活せざるべからざるの悟境に進入し、茲に全く、泰山教の教化を受け、暗黒無明の世界より離脱して、明澄光明の世界に傳住されたのであつてこれ正に泰山教の教旨を信託されたのであるから、明らかに、靈性は已に開發され玄妙尊貴の大靈力は御獲得になつたのであります。故に寸毫も遲疑せず、寸時も躊躇することなく、

直に御實驗なさい。しからば、忽ち至玄至妙の大靈の方は、その指點より滾々として、無限に發現せらるゝことは、熾々として、火を降るよりも暖らかであります。

第四章 陶器靈感術

第一節 物質主義者の矛盾

現代の如き、物質科學の旺盛なる時代に於ては、物質萬能主義に陶醉する者の多いことは、また已むを得ざる次第であります。而して、物質萬能主義者は、物質さへあれば何事でも出来ないことはないといふ迷信に生きて、その囁く物質が、如何にして發現したかについては素より知らず憚なく、また、理めてそれを知らうとする意志もないのであつて、日々に物質を崇拜し、物質に支配され、物質に盲従したる真なる生活を爲して居るのであります。

故に、これ等の人は肉眼にて認識し得る物質の存在については肯認するが、肉眼にて認識し得ざる實在については、これを否定して憚らない。しかも、それ等の人は自己の精神の存在することは肯認して居る。然して、その精神なるものは、肉眼にて認識し得ざる所の實在である。然るに、その人々は前述の如く、肉眼で認識し得ざる實在は否定して居る。これによつて觀ますれば、物質萬能主義者は、一面に於て空の實在を認識肯定し得ら、他の一面に於ては空の實在を否定して居るの矛盾に墮して居る。何といふ愚にも亦、愧れむべきではありませんか。

第二節 物質主義者の崇敬は電子

前節に述べたる如く、愧れむべき矛盾の生活に墮して居る物質主義者等が、至上至極と崇び、偉大なる力よと讚美しつゝあるところのものは何か。それは、即ち電子であります。しかして彼等は、その崇拜する電子なるものは、一切萬有の根元であり、一切萬有

は電子によつて変態され、電子によつて創造され、電子によつて變化されつゝありと信じて居るのであります。聚して然らば、電子なるものは、宇宙間に於て、他に比すべき何物もなき、眞乎絶大の作能を現する力の本體であるといふべきであります。

しかるに、宇宙間には、この眞乎絶大の作能を現する電子の力も尙且感ぜざるの物質がある。それは陶器といふ物質であります。如何に強力なる電流を通じても陶器には更に感電しない。しかるに、凡夫等の所謂不可思議にも、電力の更に感ぜざる陶器なる物質に、良く感電するところの至玄至妙の力が正に宇宙間に存在するのであります。

電子以上の偉力の證明

然らば、この力こそは、電力以上の力であり、電力の及ばざる偉大なる力であるといふことを信ずることが出来る。私はこの力の及ばざる偉大なる力を大靈力と稱して居るのであります。

第三節 陶器靈感術の實驗

いま、左の陶器靈感術の秘法を修して實驗して御覽なさい。直にそれを立證し確信なさることが出来るでせう。

(實驗) 座式態度に則りて、その器物は、瀬戸火鉢でも、井でも茶碗でも陶器なれば何でもよろしく、その器物の一角に二本の指頭を當てて、

『この瀬戸火鉢全部、又はこの陶器全部(井の場合には、この井全部)に靈力を傳ふ。』と、思念して、大自由大自在秘法を二三分行すれば、指頭より發現する靈力は、その陶器全部に感傳するから、その陶器へ誰人でも觸く指なり手なりを觸れると、恰も電氣に感じたる如くに感電があるのであります。こ

の感電する力こそは、正に、電氣以上の偉大なる力であることを誰人にも否定することは出来ません。陶器へ直接指頭を觸れず、座式態度を持ち離れて修法するも同じです。(巻頭寫眞第九圖参照)

第四節 電子崇拜の迷信を打破す

また、如何に頭迷なる物質科學者も、この實驗の前には、その電子崇拜の迷信も根本から覆へされざるを得ないのであります。私がかつ陶器靈感術を作りましたのは、物質萬能主義に陶酔して、無明の生活に墮れ居る體れむべき物質科學者の迷信を打破し、之によつて、宇宙大靈の實在を悟らせしめ、靈性を顯現せしめて、光明至樂の靈境に歸入せしめんが爲であります。

第五節 電氣療法は靈學療法に及ばず

また、この實驗によりまして、之を治療方面より觀察すれば、電力の及ばざる偉大なる靈力を作能するわが靈學療法は、彼の電氣療法の諸治療法の遙く及ばざる偉大なる治療法たることは、論ずるの要なき、實に明白のことであつて、電氣療法で効果なき癩症に對しても、わが靈學療法は必ず効果を奏するものなることを立證して餘りあるのであります。

第六節 教理と現實一致

既に御承知の如く、泰山靈學は、眞に大靈の實在を悟らしめ、しかして、その偉大なる靈力の實現によりて之を立證し、以て一切の業苦を除滅し、至淨至樂の光明世界を建設せんとするのであつて、しかも、寸毫の交理空論なく、徹頭徹尾、教理と現實と一致するるのであります。

彼の、靈術などと誇稱し、その實、靈力の實体を知らず、唯、精神力を以て治療に従事する、精神療法等は、純眞の靈理を實

證するところの、わが、陶器靈感術などは、夢にも作り得ないのであります。

第七節 靈力實證術

實に、この陶器靈感術は、世界未曾有の靈力實證術であります。

陶器靈感術を行ふに用ゆる、**大自由大自在秘法**は、靈通法のところに用ゐてありますから御覽下さい。

尚、御修練の積まぬ中は、五六分間乃至十分間も御修法なさるがよろしい。

それから器物に直接指頭を觸れずに、器物より離れたところに居て、その器物に指頭を向けて御修法になつても、直接と同様その器物に靈力は感傳いたします。また、他家へ器物を置き、それに修法を行つても同様であります。靈力の玄妙作用は、これ等の實驗によりまして一層御確信が強くなりましたらう。

早く、凡夫等に實驗をしてお見せなさい。彼等は、この玄妙なる大靈力の作能を体験し、眞に不可思議なる現象として、大いに驚嘆するのであります。

第五章 靈動法

靈動法を修して、靈動を起すと、血液の循環を正調にし、健全細胞の作能を旺盛にし、心氣頓に爽快となるのであります。

第一節 靈動法實驗

(實驗) 座式態度にて、兩膝を張り合緊し、

「靈動を起す。」と、思念して、熱心に**大自由大自在秘法**を行ふのであります。起り易い人は、直に靈動が起りま

す。起り易い方は熱心におやりなさい。即ち勇氣、忍耐力、誠實を以て熱心に修法なさい。必ず靈動が起つて參ります。靈動の起る状態は一瞬ではなく、初めから、上下動を猛烈に起すのもあれば、微々たる前後動から、猛烈なる前後動となつて、腕部を強く打つやうになるのもあります。能々、靈動となつて、座したるまゝ、前進したり、ピョン／＼と數回を飛んだり、クルリ／＼と身体が飛び廻つたり、バタリ／＼と身体が疊を離れて上下したり、または、靈動しつゝ後や横へ轉んだりするものもあります。

立式でやりますと、地を離れて五寸一尺または、それ以上も上つたりいたし、または飛躍前進し、前進しつゝ廻轉いたしたりします。實に愉快此上ないのであります。

第二節 全身靈動

更に、仰臥して兩脚を揃へてのばし、兩手を股の兩側に密着し、頭と足を平直にして、靈動法を修すると、全身の靈動が起つて參ります。

第三節 靈働按摩

また、座式の態度に在つて、左手を上げて肩と平直に伸ばし、右手は右股の上において「**靈働按摩を起す**。」と思念して、靈動法を修すると、左手は忽ち右曲して右肩を猛烈に靈打するにいたる。之を反駁に右手を舉げて修法すると、忽ち左肩を靈打するのであります。

第四節 左手靈動、右手靈動、立式靈動

その他、左手靈動、右手靈動でも自由自在に出来ますから、御熱心に修法をなさい。

皆さん方が、御修練が積んで、いつも靈力が体内に充溢するやうになりますと、起立して兩手を垂下したまゝ「**靈動を起す**。」

と思念したのみで、身体は自然と軽くなり、フハリくと地を離れて上るやうになります。

靈動法を熱心に修行して、兩手が自由に靈動を起し得るやうになつて貰ひたい。なぜかと申せば、次ぎに御傳授する、靈示法を行ふに際し、手の靈動を活用すると大層便宜なことがあるからです。是非、御熱心におやり下さい。

× × × × × × ×

第五節 精神と靈との別

世人は勿論、彼の精神療法家や靈術家等も亦、精神と靈は同じなものである如く思考して居りますが、精神と靈とは同じではありません。御覽なさい。私は今、靈動按摩を行ひますが、これを行ひながら、私は貴下方とお話が出来ます。靈動はこのやうに起りつゝも、私の精神は自由に貴下方との對話をなしつゝあるのです。これに見ましても、靈と精神は別のものであるといふことが證明されます。

第六節 呼吸式靈動と大差あり

呼吸法によつても靈動は起りますが、呼吸式による靈動は身体に寒さを覚え又疲労を感じることですが、泰山教に於ての靈動は、これと反對で、身体が温かくなつて靈動が起つて参り而も少しの疲労だになく頗る心身爽快になります。これは御參考までに、お話いたしておきます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

第七節 朝起き自由法

尚、ついで乍ら、こゝに傳授いたしておきますが、翌朝何時に起きなければならぬ用事がある場合には、前夜臥床のときに、その時間を思念する、假令ば、起きんとする時間が午前四時であれば「明朝四時に起きる。」と思念して、大自由自在秘法を修し乍ら寝むつて終ふ。翌朝、目が覺めて時間を見れば、正に四時、實に分秒も誤らず、思念した通りに目が覺めるのであります。眞に自由自在でありますから、何時でも實驗して御覽なさい。

第六章 靈示法 (靈知法)

靈示法は 大靈尊の御靈示によりて、天候、作物の豐凶、商戰の盛衰、事變の成否、經綸の良否、試験の及落、性格の善惡、相擲の高低、天災地變の豫知、住宅の良否その他人事に關する吉凶禍福を靈知するの秘法であります。

第一節 靈示法の實際

これより、その實際を傳授いたします。座式の態度を正しくして

秘 法

我が精神は健全なり、我今、謹みくくして

大靈の尊に念願し奉る

仰ぎ希くは(何々の事について)御靈明に照し御靈示を垂れ給へ

(何々なれば)右手を靈動又は靈打し(否らざれば)

左手を靈動又は靈打し、以て、御靈示を垂れ給へ

と、思念して、兩手を股の上に置いて、一心に大自由大自在秘法を修するのであります。右思念文の中カッコの中の、何々の事については、その靈示を受くべき事候、假令ば、縁談の良否とか、事業の良否とか、待人の來否とかを云ふのであつて、次ぎのカッコ内の、何々なれば、とは、良ならば、とか、待人が來るならばとかをいふのであり、その次ぎのカッコ内の、否らざればとは、不良なればとか、待人が來ないならばとかを云ふのであります。

この御合、この縁談が良くあつてくれ、ばい、とか、待人が來てくれ、ばい、とか、さういふ、私慾を一切出してはなりません。思念後、一心に大自由大自在秘法のみを修するのであります。さうしますると、左手右手何れかが靈動又は靈打を始め、その眞實を靈示さし、のこあります。

今試みに、明日の天候の靈示を受くこととせんか、思念文中の最初のカッコのところを、(明日の天候について)とやり、次ぎ

のカッコのところを(晴なれば)とやり、その次ぎのカッコのところを(雨なれば)とやつて、思念する。而して、大自由大自在秘法を修して居ると自づと右手が靈動する。そのときは明日の天候は晴といふ靈示であります。もし又、左手が靈動をすれば、それは雨天の靈示であります。

第二節 靈示は純眞正確

今晩はこんなにい、星の夜なのに、靈示では明日は雨天とあるが、ほんとうだらうかと、その靈示は疑はれるやうでも、あしたになつて見ると、靈示の通りたしかに雨であります。大靈は一切を知ろし召す純眞の本體でありますから、その靈示に少しも間違ひはないのであります。

今は、ただ晴雨二種の靈示であります。もつと、複雑な又は詳細な靈示を受けやうとするには、思念文中のところを斯うすればよいのであります。

「晴なれば右手を一打し、雨なれば二打し風なれば三打し、曇りなれば四打し、雪なれば左手を一打し、晴風なれば二打し、北風なれば三打し、南風なれば四打し。」と思念して修法すれば、その靈打の數によつて、晴雨風を一時に靈知することが出来るのであります。靈打とは、股の上においた手が靈能によつて、自然に股を打つのであります。

右のやうな、思念法によつて、何事にも工夫適用し、以て一切の事柄についての靈示を受くことが出来るのであります。さきに、靈動法傳授のときに申して置いた通り、靈示法に手の靈動を活用するの便宜なるが故に、手を自由に靈動し得るやう、修行しておかれない。と希望いたしておきましたが、まだ、靈動が起らない方があれば、靈動法を用ひずに、左の方によつて靈示を受けるのであります。

第三節 靈示法の別法式

今、假りに待人に馳する靈示を受んとしまするか、座式態度を保持して、左手を左股の上におき、右手を肩に平行して右に伸ばし、(明日誰々が来るならば右手を上に乗げ、来ないならば下へ下げ)と、思念して修法する。それで、右手が上へあがれば、その人は来るのである。次ぎに、又以前の如く、右手を伸ばして、(午前中に来るならば上にあげ、午後に来るならば下に下げ)と、思念して修法する。そして下にさがれば、午後に来ることがわかる。そこで、今度は何時頃にくるのかを靈知せんとするには、今行つた方法を繰り返して修法する。斯くの如くして、細より靈に入つて靈示を受るのであるが、前述の靈動活用の方法から見れば、海に手敷があるから、靈動を活用されたのであります。また、座式態度にて合掌をなし、合掌の手を上へ上げ下へ下げといふ方法でも出来るのであります。

第四節 靈 覺 法

皆さん方が、益々御修行がつかれば、靈覺といつて、座式態度を保持したまゝ、靈示法を修すると、その靈示さるゝことが、靈眼に文字となつて見え、または靈耳に聽となつて聞こえるやうになるのであります。初め、靈示法の實際は、毎翌日の天候について試みるゝのがよろしい。それは、その靈示の當否の結果をスガ翌日知ることが出来るのでありますから。斯くして修練され、靈覺的確なる靈示の顯はるゝやうになつたら、種々なる事柄についての靈示をなされても、その靈示の顯はれば、必ず、正確に適中して居るものであります。

第七章 禽獸虫魚治療秘法

第一節 秘法可能の靈理

靈は差別を超越したるものであることは、靈の講義に於て説明いたしておいたところでありました。故に、靈力は差別なき作能を爲すものであることは、自明の眞理であります。今、疾病治療の方面に就てこれを見ますれば、靈力は萬物の上に作能してその疾病を治癒せしむるのであつて、動物は治療出来るが植物は治療出来ないとか、日本人の治療は出来るが、外國人の治療は出来ないとか、他家の者の治療は出来ても、自家の者の治療は出来ないとか、信する者の治療は出来るが、信ぜざるものゝ治療は出来ないとか、治療することを議つて居る者の治療は出来るが、それを知らざる者の治療は出来ないとか、直接治療は出来るが、遠隔に於ける間接には出来ない、とか、いふやうに、差別といふことは更になく、一切の者の靈氣を自由に治療し得るのであります。かかるが故に、禽獸虫魚の疾病も治療せしむることが出来るのであります。

第二節 禽獸虫魚治療秘法の實際

これから、禽獸虫魚治療秘法の傳授をいたします。直接なれば、其能める禽獸虫魚に手を觸れ、遠隔なれば、紙片へ禽獸虫魚の種類、種姓、飼主の住所姓名等を記して治療法を行ふ。假令ば、病馬の遠隔治療を爲すには、飼主、何町村何某、鹿毛何才何某と、記したる紙片を机の上におき、「何町村何某の飼育にかゝる鹿毛何才の何病を治す。」と、思念して、人間に對する遠隔治療の場合と同じき、態度方式を以て、他人治療法を修すればよろしいのであります。直接治療の場合は、手を觸れて他人治療法を修すればよろしい。また、目前に於て手を觸れずに施術する場合には、前述の如く、紙に認めずとも、唯、前記の事を思念し、座式又は立式の態度を保持して、他人治療法を修すれば、よろしいのであります。本秘法の實際は、靈力靈眼録に掲げてあります。

第八章 樹木草莽治療秘法

この治療法の可能なることは、萬般治療法に於て述べたる靈理によつて明らかであります。

第一節 樹木草莽治療秘法の實際

しかして、樹木草莽の疾病治療法に關する、修法及び方式一切は萬般魚治療法に於ける、修法及び方式に準じてやればよろしいのであります。松樹や楓の枯死せんとしたのを蘇生せしめた實際など靈力靈感録にあります。

第九章 靈力體得後の注意

第一節 悪魔を滅盡せよ

靈力體得後數日にして身體に異狀を呈することがあります。それは、大靈の照映によつて潜める悪魔が顯はれて來るのであります。即ち、過去の罪惡根柢が、靈力作能のために現出されたのであります。その場合には猛烈に自己治療法を嚴修して病魔の滅盡に努力せねばなりません。悪魔は、圓滿幸福を破壞するものですから、悪魔に負るやうではならぬ、寸時も早く悪魔を滅盡して、眞實圓滿幸福の生活を實現することに努力せねばなりません。

第二節 慢心を起す勿れ

靈力を體得して、少し位、治療でもやつたり、秘々の靈法の實際を試みたりすると、モウ大層偉い者になつたやうな氣になり、慢心を體得して、少し位、治療でもやつたり、秘々の靈法の實際を試みたりすると、モウ大層偉い者になつたやうな氣になり、慢心を起す人がないでもない。しかし、慢心を起すやうになつては駄目です、所謂、天狗になつては不可ません、慢心は虚偽精神であります。虚偽精神は平安の心を擾亂す。心亂れ放從驕慢なれば、大靈の尊嚴を冒瀆す。故に大靈の力は發現せぬこととなります。決して慢心を起してはなりません。

第三節 進んで他を救へ

皆さん方は、既に、大靈の尊嚴の御恵みに浴され、靈力を體得し、迷闇より光明界に轉向し、歡喜の天地に安住することが出来るやうになられましたことは、眞實悦びに堪えません。しかし、貴下方は、自分が救はれたんだから之で良しとしては不可ません。自分が救はれて歡喜したならば、進んで他を救ひ以て歡喜せしめねばなりません。もし、他を救ふことを妨ぐる者があつたならば、それは正しく惡魔です。妨ぐる者が家族であらうが、他人であらうが、それは衆生の圓滿幸福を破壞するところの許すべからざる惡魔ですから、そんな惡魔に屈することなく、猛然起つて惡魔を撲滅し、勇往邁進、衆生濟度に努力せねばなりません。

第十五講 勸行篇

行法の態度

左に揃ぐる、朝の諸行事は、朝起きて、口をそそぎ、顔を洗い、手を淨め、從來、佛壇に向つて禮拜する習慣の人は、佛壇の前にて、また、神棚に向つて禮拜の習慣の人は、神棚の前にて、神、佛、何れにも禮拜の習慣なき人は、座敷の床間に向つて、床間なき室なれば、その室の中央に於て、座式態度を正しく持して行法するのであります。

座式態度の由來

座式態度について、一寸その由來を述べておきます。

この座式の態度は、私が勝手に造つたものでもなければ、他のものを模倣したのでもなく、私が、大正五年に見神、靈感の際に、自然に斯ういふ態度になつて居つたのであります。その後私は、各地寺院に於て、わが座式態度と同様の佛像のあるを多く見ました。

宇宙自然の相

それで私は、釋迦も悟道に入つたときは、やはり、私とおなじ態度であつたのかと、思ふたのであります。實に、泰山殿の座式態度は、宇宙自然の相であると、私は信ずるのであります。

また、この座式の態度は實に泰然自若であつて、大體の相であります。皆さん方が初対面の人にして、かういふ態度の方を見なされたときは、その人は、修養の積むだ、贈力の据はつてる人であることを信じてよろしいのであります。

これに反し、膝を密着し、身体を前屈して座する者は、必ず益すなきの小體者であります。

毎朝の行事

(一) 感拜の行事

我が精神は健全なり、我今、謹み謹みて

大靈の尊の大廣前に曰す

大慈大悲を以て、容易に得難き、尊き大御力を我

に恵み授け給へることを謹み謹みて

感激拜謝し奉る

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

(本文一遍秘文三遍を一回だけ行ふ)

〔註釋〕 この行は、古來、衆多の人々が、深山に籠り、或はその他、種々なる苦修を行しても、容易に得ることの出来ぬ、尊き靈力を、恵み授け給へることを、真心以て感念し、大靈の尊に對し奉り、謹んで拜謝の誠意を表する行であります。

〔注意〕 この後の諸行法は、座式態度そのままでやるのでありますが、この行法だけは、座式態度で、瞑目結口して合掌し、その合掌は直立せしめて、鼻の端と指頭と相對する位置に擧げ、顔面と合掌との間隔を二寸位にして、此行法を行ひ終れば、即ち叩頭する。そして、座式態度を保持して、この後の行法を順序を追ふて嚴修するのであります。

行法を修するにも、清静法を嚴修するときと同じく、音聲を出さずにやるのであります。

(二) 悟信の行事

我が精神は健全なり、故に我は大自然にして大自在なり、我は今日圓滿無限の幸福を享有す。

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。

〔本文一週、秘文三週の割合を一回とし、これを五回繰り返す〕

〔註釋〕 この行は、宇宙大眞理を悟覺したる我は、實に大自然大自在であつて、圓滿無限の幸福を授かり有つて居るのであるとの確信を強めるの行であります。

(三) 感謝の行事

我が精神は健全なり、我れ今謹みくくして

大靈の尊、皇祖皇帝陛下、親祖、恩人、長上、衆生の御方々に、感謝し奉る

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。

〔本文一週、秘文三週を一回だけ行ひて叩頭す〕

〔註釋〕 我等が今日圓滿幸福の生活を實現することの出来るのは、大靈の尊、皇祖皇帝陛下、親祖、恩人、長上、衆生の御方々の御恵みによるのであるから、日常座臥、これ等の御方々に對し奉り、感謝の意を表せんければならぬことは、泰山北斗の第一の御法に於て、説述して置きましたので、皆さん方も、この行を爲さざるべからざること、良く御理解になつて居ると、私は信じます。

(四) 本願顯現秘法

「我が精神は健全なり、我れ今謹みくくして

大靈の尊に念願し奉る」

我が精神は健全なり、故に我れは益々靈性を研磨し、無量無限の靈能靈力靈光を顯現し、以て大自由大自在無碍の至樂境に安住し、以て遍く一切の衆生を濟度すべし

仰ぎ希くは

大靈の尊御照覽ありて御守護を垂れさせ給へ
サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

(本文一遍に秘文三遍の聯合を一回とし、これを五回繰り返す。但し二回目よりは、本文當初の「」の分を除くこと)

(註釋) 泰山教に入信し、宇宙の大眞理を悟得したる上は、益々靈性の研磨に精進し、大靈光を顯現し、無量無限の大自由大自在に安住し法悦を得るとともに、進んで、無明界に悩める一切衆生を救ひ、大靈尊の御恵みに浴せしめねばならぬ、そして靈光文脈の體験を爲すことが、泰山教信者の根本の願望であります。依つてこの行を嚴修せねばならぬのであります。

(五) 懺悔滅罪秘法

「我が精神は健全なり、我今謹みくつて
大靈の尊に念願し奉る」

我が精神は健全なり、故に我は大自由大自在無碍なる絶大無限の偉力を有す、我今、この偉力を以て、我が過去一切の罪惡を滅盡すべし

仰ぎ希くは

大靈の尊御照覽ありて御加護を垂れさせ給へ。
サブリーム、ヒプリッツ、オブユニバーズ。

(本文一遍に秘文三遍の聯合を一回とし、これを五回繰り返す。但し、二回目よりは本文當初の「」の分を除くこと)

(註釋) 我々は、過去無量の久遠より罪惡を犯ねたり、偏その日く罪惡を造りつゝあるのであります。故に務めてその穢果

の罪愆を滅盡し、純眞清淨無垢の靈體、即ち大靈に成らねばならぬのであります。その爲にこの行を修するのであります。過去と申すは、この行を修する時間前までを指すのであります。

毎夕の行事

(毎夕の行事は、夜食後又は寝前に行ふ。淨手、漱口、及び 行法の態度は朝と同じ)

(一) 感拜の行事

我が精神は健全なり、我今、謹みくくて
大靈の尊の大廣前に白す
大慈大悲を以て、容易に得難き、尊き大御力を、我
に恵み授け給へることを謹みくくて

感激拜謝し奉る

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

(本文一遍秘文三遍を一回だけ行ふ)

この行法のごとは、毎朝の行事の(一)のごとくに説明いたしておきましたから、こゝには略します。行法の態度は、朝とおなじく合掌法でやるのです。そして、この次ぎの感謝の行事からは、何れも座式態度で修法するのであります。

(二) 感謝の行事

我が精神は健全なり、故に我は大自由にして、大自在なり、我今日、圓滿無限の幸福を享受せしことを
大靈の尊、皇祖皇帝陛下、親祖、恩人、長上衆生の
御方々に、謹みくくて

感謝し奉る

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

(本文一遍に秘文三遍の割合を一回とし、これを五回繰り返す)

「この行事については殊更に註釋を付せずとも、皆さん方は、よくその意義がお分かりにならるから、別に説明は致しません。しかし、こゝに御注意申上げたいことがあります。それは「今日はいろく心配事や苦惱があつたのだから、決して圓滿幸福を享受した日ではない、依つて今夜は、この行事を修することは要らん。」と、いふやうなお考へが出はすまいが、萬一、さういふ考へが出たとすれば、それこそ大なる過ちであります。

既に宇宙の眞理を悟り、因果律の眞存を理解したる我々は、その苦惱なるものは、過去に於て爲せし因の結果が現はれたものであることを明らかに知る。仍て何等の不平不満の起る筈はなく、また他を怨むの愚に陥ることはない。そして、將來苦惱なからしむるために、益々過去の罪惡を滅盡することに努むると共に、また、彌増し勇氣を鼓舞して至誠の精神生活を進めねばならぬのであります。

ですから、苦惱と思ふその苦惱は、實は何等の苦惱でもなく、苦惱と思ふは、それ即ち迷いであるのです。迷いは無明であります。我等は大靈の御恵みによつて、既に無明界を解脱して、光明界に安住して居るのであります。光明界の安住は、即ち圓滿幸福であります。故に、悟入したる我等の日常生活は、圓滿幸福の生活なのであります。依つて、我等は、この感謝の行事を毎夕修せねばならぬのであります」

(三) 本願顯現秘法

「我が精神は健全なり、我れ今謹み謹みて
大靈の尊に念願し奉る」

我が精神は健全なり、故に我れは益々靈性を研磨し、無量無限の靈能靈力靈光を顯現し、大自由大自在無碍の至樂境に安住し、以て遍く一切の衆生を濟度すべし

仰ぎ希くは

大靈の尊御照覽ありて御守護を垂れさせ給へ
サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

(本文一遍に秘文三遍の割合を一回とし、これを五回繰り返す。但し二回目よりは、本文當初の「」の分を除くこと)この行事の註釋は朝の行事のところにおいて置きましたから、こゝには省きます。

(四) 懺悔滅罪秘法

「我が精神は健全なり、我今、謹みくくして

大靈の尊に念願し奉る」

我が精神は健全なり、故に我は大自由大自在無碍なる絶大無限の偉力を有す、我今、この偉力を以て、

我が過去一切の罪惡を滅盡すべし

仰ぎ希くは

大靈の尊御照覽ありて御加護を垂れさせ給へ

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。

(本文一遍に秘文三遍の聯合を一回とし、これを五回繰り返す。但し二回目よりは、本文當初の「」の分を除くこと)
「この行事は、朝の行事中と同じでありますから、別に説明をいたしません」

朝夕の行事とも、暇なされば、各十分内に修することが出来ます。本教に於ける行法は、水垢離をするとか、又はその他の修行と違ひ、坐の上で、端座したまふ十分足らずの修法であつて、實に容易なることであります。

凡夫の求めて、容易に得べからざる靈力を体現し、常に光明世界に安住せんとするからには、凡夫と異りたる努力を要することは當然であります。しかも、その努力は朝夕に五分乃至十分間を要するだけです。然るに、この容易なる行を怠るやうでは、折角、享受されたる靈力を失ひ、再び無明苦患の地獄に墮することとなるのでありますから、夢にも怠る事なく、毎日、この行法を厳修なさねばなりません。

尚、他者のときは、その宿つた家で、汽車旅行の時は、車中に腰かけたままにて行法を修すればよろしいのであります。朝夕の行を修して居ると、その修法中に於て體內へ靈力が流動するを覺えます。そして、一ト朝でも、修法を怠れば、その一日は實に重荷を負うて居るの感がいたします。

「念ふことは現はる。」とは、第七講、懺我觀のところにも強く説述しておきましたが、思ふことは必ず顯はるゝものであります。

先程、靈通法や他人治療法など御實験になつたときには、その思念なされた通り顯現したでせう。あの通りに、念ふ事は必ず顯はるゝのでありますから、この朝夕の行事を厳修なされば、必ずその念願が具現さるゝことは、天理の光明に照して昭かなることでもあります。

食事の行事

凡夫等は、人間の力を過大視し、何事も人間の力で出来ると迷信し、人智人力で及ばざる偉大尊貴の力の實在を無視してをる。物質科學は、凡夫の智識であり凡夫の力の現はれである。この物質智識で少しく新らしき事でも工夫するか、凡夫等は直に誇大妄想狂となつて、空中を征服したとか、山岳を征服したとかと叫んでをる。殊に甚だしきは、自然を征服するのが物質科學の使命であると妄語して者さへある。この自然を征服するといふ思想は、實に危険思想であつて、正に反逆精神であり、人間生活の圓満を破壊する悪魔であるとは、本教聖典四講人職黨のところに説述して置きましたから、皆さん方の御記憶にあることと思ひます。皆さん方は、既に御理解になりました通り、太陽も地球も水も火も空も人間も禽獸草木其他一切現象は、至上至尊の宇宙大靈の御恵みによつて造られたるものであります。しかるに、物質主義の捕虜となつてる物質科學者中には、總ての物は人間の力で出来ると迷信し、遂には人間といふ宇宙現象も亦人間の力で出来るといふ、甚だしき迷妄に陥つた醒れむべき者さへある。先年、アメリカの物質科學者が多年苦心研究の結果、人造人間に成功したと、アメリカの新聞電報で世界に報道され。また、その數年後に於て、今度は、獨逸の物質科學者の手によつて、人間を製造することに成功したと、獨逸より世界各國の新聞紙へ電報で報道した。併し、その後何等の消息がないから、勿論失敗に歸したことでせう。

この報道を得た私の心鏡には、現代の物質科學者等の、ますます暗黒なる迷路の奥深く墮ちて、苦しむ復へるいとも憐れなる姿が、ありくと映つて見えた。そして私は、彼等に對し眞に哀愍の情を起した。汝等が、長き時間と、多くの命と、そして、汝等の貴重なるべき精神力とを費して收得するところは、世人に對する欺瞞と、自己に對する苦痛そのものではないか、毫末の幸福も人類社會へ歸しては來ない。青色の野菜を食しても、白色の澱粉を食しても、赤色の血脈が出來、柔かき物や短き物を食べても、硬き爪や、齒や、長き毛髪が出來るといふやうな神秘能力や、玄妙不可知の精神などは、汝等が千年萬年かゝつても到底眞實の出來ない作能である。もし夫れ、汝等の力にて人間なる神秘體が創造されるならば、先づその前に於て、不具なる人間たる汝等の心身を改造して、その闇黒の殼より解脱して、眞實光明の人間體に應生せよ。と、そぞろに同情の念を湧き起したのであります。

物質主義者は、至上光明の宇宙大靈の在りますことを覺らず、常に闇黒の世界に彷徨してをる。闇黒の裡に居ればこそ、闇き己れの姿が分からずにをる。そして、苦患の惱みに喞んでをる。苦患は即ち悪魔であります。

現代人は、光明眞實の宗教、即ち宇宙大靈の眞存を信ぜしむる聖者によつて教育はされずに、自我の存在のみしか知らざる無明の思想者によつて教導されて居る。故に、常に無明界を脱出することが出來ず、悪魔の危険の手より免るゝことが出來ないのであります。

哲人、プエリントン等は、斯ういふことを申した。「宗教に據らずして人を教育するは、即ち技倆ある悪魔を作るなり。」と、前にその通りで、幸福を招來せず、苦惱のみを造成するやうな、さきにお話した、人造人間の科學者の如きは、即ちプエリントンのいふ悪魔であります。

物質主義に捕はれたる凡夫等は土火水金空氣、太陽の光熱等、日常生活に必須なるものは勿論、一粒の米さへも、自己の力で出來得ないことを悟らず、何物をも自力で出來得ると迷信してをるから、彼等は日常生活に更に感謝の念を生じない。故に、食事といふ生活上の一事象に對しても亦、感謝することを知らぬ。感謝の生活を爲さざる者は、傲慢であり凶暴であります。

我等は、宇宙一切現象は、宇宙大靈の御恵みによつて出來てをるものである。故に、その食事を爲し得るも亦、大靈の御恵みによるものであると悟覺した。ですから、我々は食事を爲すに當つては、大靈に感謝せねばならぬことは當然のことです。

これから、食事についての行法をお示し申します。

朝食前の行事

我が精神は健全なり、我今、謹み謹みて
 大靈の尊の大廣前に白す
 我れ及び我が家族が、今朝今日、種々なる尊き御物を
 拜戴喫食し得ますることを謹みくくて
 感謝し奉る
 サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。



〔註〕何の罪もなき、ほんの孤獨生活の方であれば、本文中の「我れ及び我が家族が」の「我れ」を「我れ。」とすること。
 〔註〕朝食に今朝今日としたのは、朝、晝、夕三食以外に間食する機会もあるから、唯、今朝とせず今朝今日と置き意義を持

たせたのであります。

朝食後の行事

食事終れば、即ち左の行法を行ふ。
 我が精神は健全なり、我今、謹み謹みて
 大靈の尊の大廣前に白す
 我れ及び我が家族が、今朝、種々なる尊き御物を拜
 戴喫食し得ましたることを謹み謹みて
 感謝し奉る
 サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバーズ。

この行法の態度方法は、食前の行法に同じく、瞑目、結口、合掌(圓の如く)して、本文一遍に秘文三遍を一回行ひ、同時に、叩眼して眼を開き「頂食ました。」と申して、箸を置くのであります。
 〔註〕ほんの孤獨の人なれば「我れ及び我が家族。」の「我れ。」とすること。
 〔註〕朝食後の行事には、本文中の「今朝。」を「今晝。」とし夜食後の行事には「今夕。」とすること。

この食事の行事は、自家で食事をするときばかりでなく、他家に招かれたときでも、何處で食事するときでも、必ずやらねばなりません。他人の前だからなどと、他人へ氣遣をしてやらないやうなことで不可ません、靈的生活を爲す者は、自他の差別がありません。他人へ氣遣して、大靈尊に對し奉り感謝出來ぬといふ、そんな愚はなさらぬ。必ずこの行法を嚴修せねばなりません。尚、この食事の行法だけは、御家族一同にもやらせたいのです。ついでには、この行法の理由を御家族方によく御説き聞かせなすつて、御家族方御一同も、ともに行法を修せらるゝやうにして欲しいのであります。

然れば、この食事に對する感謝の行法が因を爲し、御家族方は、識らず、知らずの間に、靈性が開發され、次第に靈氣は一家に漲り、圓滿幸福の生活顯現の基ともなるのであります。

○神體、佛像に對する行法

第十一講（靈尊）の末環に於て、神體、佛像に對し敬意を表すべきことを説いて置きましたが、今、茲にその行法をお示し致します。

社内又は佛閣内に於ては、その神體又は佛像の前面にて、座式の態度を持し、また社前、寺前に於ては、立式の態度にて左の敬法を行ふのであります。

**我が精神は健全なり、我今、謹み謹みて
敬意を表し奉る**（本文一回）（秘文三回）

行じ終つて少しく頭を下げる。汽車旅行の際、車窓から神社、佛閣を遠見したる場合に於ても亦、必ずこの敬法を行ふことを忘

れてはなりません。

○墓地に對する行法

墓地の前を過ぐる際に於ては、左の行法をいたすのであります。

我が精神は健全なり、汝、未精靈冥せよ。（秘文）
（本文一回）（秘文三回）

右は墓石一基の對合であります。墓石二基以上の際は、（汝）の處を（汝等諸未精靈）とするのであります。

自家、他家の佛堂に對しても、右の修法を行ひ、又、汽車旅行の際、車窓から墓石を遠見したる場合に於ても、右の修法を行ふのであります。路上葬祭に會ふたる際に於ても亦、この修法を行ふのであります。

○葬式の行法

佛式の對合に於ては、靈尊の靈、その戒名を誦して

**我が精神は健全なり、故に我は自由自在無碍
なる絶大無限の偉力を有す、我今、此偉力を以て**

汝を靈化せしむ。(秘文) (本文一回) (秘文三回)

神聖の御合に於ては、その姓名を誦して右の修法を行ふ。耶教神の御合に於ても亦同じ。行法の態度は、その標幟、態度の儀禮により、立式又は座式何れともするのであります。

佛敎に於ける、回忌法要の御合に於ては、この法式に準じて、右の修法を行ふのであります。

右の地に對する行法と、儀式の行法とは、何といふ偉大なる行法ではありませんか。即ち、未だ精靈とならず、死して尚、迷妄の境に悩める魂をして大靈化するの行法であります。この行法によつて隨に靈化せしむることが出来るのであります。それについても皆さん方は、常に至誠の精神を以て精進し、何時にても、我は大靈なりとの確信を有たねばならぬのであります。

靈力を獲得せざる僧侶、神官等が、讃經を爲し祝詞を奏して中靈設祭をしたところが、魂をして、奈何でか、精靈化し、神靈化する事が出来ませうか。

皇室に對する敬法

一、陛下、皇族方に拜謁の御合
 一、陛下、皇族方御通過の御合
 一、執事廳その他に奉擧の御眞影、皇族方の御眞影、御繪姿、御影像を拜見したる御合
 一、他家へ移りたる際、その家に奉擧されたる陛下、皇族方の御眞影、御眞影、御繪姿、御影像を拜見したる御合
 一、宮城、皇族方の御陵墓、學校その他に在る奉安所の前に参りたる御合、又はその前を通過する際(電車汽車その他に乗りたる御合に於ても亦直前通過に非ずして遠見の時に於ても)

右等の御合に於ては、座式又は立式の態度を維持して、左の敬法を行ふのです。

我が精神は健全なり、我今、謹みくつて
 敬意を表し奉る

サブリーム、ヒプリッツ、オブ、ユニバース。
 右本文一遍秘文三遍を一回嚴修す。

近時、わが國民思想の變化に隨きつゝあるは、罪惡、國體の眞相を理解せず、隨つて皇室に對する恭敬の觀念の稀薄に基因するのであります。

皆さん方は、泰山敎の教示によつて、皇室を敬愛せざるべからざることを悟られたのでありますから、努めて右の敬法を嚴修して下さい。

私は、往年、皇室に對する我國民思想に關する論述を「泰山敎靈力靈軌録」に發表したから、靈軌録を御覽になつた方は、御承知でせうが、御覽にならぬ方のために茲にこれをお示し申します。

皇室の尊嚴 天皇は神聖なり

天皇は罪なきの本體なり、故に 天皇は神聖なり。との思想が、我國民にありてこそ、始めて、皇室の尊嚴は保たれ、皇室に對す

る觀念は表れ、陛下に忠誠を盡くすに堪り、萬邦に冠絶せる良國體たる、皇室中心主義は強固となるのである。
近時、我國民の思想は外來思想のために汚濁せられ、國民中に、皇室の尊嚴を冒瀆し、國體の變革を企圖する者の輩出を見るに至る。眞に憂ふべき現象にして、須臾も疾く、斯くの如き思想を根絶せねばならぬ。そして皇祖及び我等の祖先が、大日本國の大精神を繼承し、以て萬邦を靈化し、全世界の人類に圓融幸福の生活を享受せしめねばならぬのである。
しかるに、我國民中に於て眞に、皇室崇敬の態度を懐くもの幾干あるやに思ひをいたして、その實際を視ると、毫に清潔に堪へないのである。

御眞影に對する不敬

官衙學校等へ陛下御眞影に對し奉り、その取扱ひ方に關し、萬一、崇敬を缺くことある場合に於ては、即ち不敬罪としてこれを所罰するは我國法である。而して、それ等官衙學校等に奉安する以外の御眞影に對し、如何に不敬の取扱ひを爲すも更に何等の所罰もない。即ち、不敬の所爲を敢て爲すも何等の懲罰を加へられたる事聞かない。何たる國法の矛盾ではないか。斯くの如き矛盾の國法に據つて、我國民に皇室崇敬の思想を涵養せしめんとするも到底その成果を收むることは至難である。
見よ、我が國の新報雜誌等に奉報する陛下及び皇族の御眞影は、我が國民が實際に於て如何に處理しつゝあるか、申すも恐れ多き極みであるが、品物の包装に之を用ひ、踏だしきは淨の場所に之を使用する者さへある。之大なる不敬行為ぢやないか。官衙學校に奉安する御眞影と、新聞雜誌に奉報する御眞影と何處に輕重の差がある何等異なるところなき同一の陛下の御眞影ではないか。しかるに、我が國民の多くは官衙學校に奉安する御眞影に對しては崇敬し、新聞雜誌に奉報する御眞影に對しては不敬の取扱ひを爲して居る。嗚呼、斯くの如きは畢竟するに皇室に對する我が國民思想が徹底せざる證據である。皇室に對する國民思想の不徹底は、延へて皇室を冒瀆し國體を毀壞し、國家を亡ぼすに至るのである。皇室を崇敬するが我國民の思想であつてこそ、我國民は強固となり、我が國家は永遠に彌増し榮えるのである。

體は強固となり、我が國家は永遠に彌増し榮えるのである。

爲政者に誨む

予が宅では、一二種の新聞しか購讀してないが、その新聞紙に奉報する、陛下や皇族方の御眞影は、常に切り抜いて淨處に奉置して居る。予が留守中には妻子が之を爲しつゝあるが、一ヶ晩間に於ける御眞影の数は、夥しいものである。唯一二種の新聞に於てすらも斯く大數である。しかも大新聞は、一日の發行紙數百萬を越えてると云ふ。然らば全國の新聞雜誌に奉報する御眞影の全數は、實に幾千萬と云ふ驚くべき巨多となる。しかるに、その中の多數は前述の如くに取扱はれて居る。
爲政者はこの事實を何と見る。爲政者が眞に國民をして皇室を崇敬せしめんとする誠意があるならば、先づ新聞雜誌に濫りに陛下に皇族方の御眞影の奉報を嚴禁せよ。而して、毎年元旦號にのみ奉報せしめ、國民をして皇室の御方方の彌増し御眞影に在らせらるゝ御眞影を拜戴せしむると共に、これを淨處に奉置し、常に崇敬の誠意を表現せしむることとし、もし犯す者は嚴罰に處すべき法規を制定してこれを取締ることによせよ。而して一方、國民をして眞實に皇室を崇敬せざるべからざる條理的徹底的國民教育を施すことに努力せよ。

思想善導の根本

これによつて、國民の全部が衷心より皇室を崇敬するに至りたる際には、元旦のみに限らず、現在の如く何時にても、新聞雜誌に奉報することを許すも何等差支なきのみならず、進んで數多く奉報せしむべきである。
陛下、爲政者は思想善導に専心して居るが、如何に専心しても國民をして眞に皇室を崇敬せしめ得べきの方法手段を盡くさざるに於ては、その効果は期待し得べきでない。爲政者よ。速かに予の提議に聽き、以て皇室の尊嚴を保持すると共に、我が全國民を

して眞平徹底したる 皇室崇敬の思想を發揮せしめよ。しからば、如何に悪思想が侵入せんとしても、更に侵入の間隙なく、國體は永遠に安泰なるを得べきや必然である。

X X X X X X

大正七年(昭和二年)春、足利市へ参りました時に、市内助戸町の進貨店で購入したときに、その商品に皇室の御寫眞の奉置してある新聞紙で包んだので、私は、主人に幾々とその不心得を諭し、淨所に奉置せしめた。

本年の夏、新潟に滞在中、七月十六日の夕刻、白山公園奥由岐賀岡へ上つたところ、そこにある露床の前に、照宮、高松宮妃、秩父宮妃三殿下の、御寫眞の奉置してある本報六月十八日発行の東京日々新聞が、泥まみれのまま捨てられているのが私の目に留まり、御寫眞の泥を拭ふて持ち歸り、淨紙に奉置した。

その日は、白山社の祭典で、巡査等は公園内の彼方、此方を監視して居つた。警察官吏は、スリヤコソ泥などを取締るよりも、こんな不敬の行爲をするものこそ、第一に取締るべきものなるに、そんなことには気がつかないと見える。

同じく、新潟滞在中に、或人のお菓子を持つてきてくれた。その菓子袋を包んだ新聞紙は、大正毎日新聞の歐文版で、敬禮奉置に關する寫眞が載つてつたが、それと並んで、高松宮妃、秩父宮妃兩殿下の御寫眞が奉置されてあつたので、切抜いて奉置した。やはり、この夏、當市内の小學校の教員宅へ参つたとき、厨へ入つたところ、用便のために、新聞紙の載つたのが重ね置かれ

た、しかも、その一番上に、伏見軍令部長宮殿下の、東京日々新聞報禮の御寫眞があつたので、私は吃驚且恐懼し、直に、その教員を發見し、淨處に安置せしめました。教員にある者が、かういふ不敬を爲してをるのでから、それ等に教育さるゝ兒女等に、皇室崇敬の誠念など起らう筈がないのであります。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

皆さん方は、御寫眞や御寫眞は、私の申す通り御取扱ひなさらばなりません。

章の由來



大章は、泰山教の表徴であります。この章は、私が考案したのではなく、私が靈感によつて現はれたものであります。請みて、この章を觀るに、大ととより成立つてをります。即ち、大とであり、また、大圓滿を表徴いたしてをります。

そして、太陽(日)は○形でありますから、大章は、大日を表徴したものであります。大日本精神は、徹て説明したる如く、靈性であります。靈性の發顯活動によつて、世界を靈化し、靈光文明の實現となり、一切衆生をして眞實、光明圓滿幸福の境地に安置せしむることが出来る。故に、大章は泰山教の表徴であり、また、大日本精神の表徴であります。

何たる偉大の表徴ではありませんか、世には、これに勝る表徴は、過去に於て無く、また、將來に於ても有得ないのであります。

卍字章の解

佛敎の表章は、卍であつて、この卍は圓滿を意味するといふが、圓滿の表れではない。陰(一)と陽(1)とが交(十)し、交(卍)

したる陰陽(十)が、將に活動(止)せんとするの象で、その活動が、未だ〇を具現せざるものであり、また、陰陽を隠現する絶対の大〇の表現でもない。

十字章の解

十字章はキリスト教の表章であります。この十字章について、キリスト教徒はかういふ説明をしてをる。
聖父キリストは、罪の子の、その罪を贖ひ償はんが爲に、十字架にかゝつたのであるから、その十字架を記念すべく、キリスト教の表章としたので、十字架は實に聖なるものであると。

しかし、この解説がほんたうとすれば、キリスト教徒は、その教祖の聖を汚すものと云はねばなりません。「お前達の罪を償ふために償は森にかゝつて死ぬぞ。」といふことになる、キリストは聖を被せんが爲に森上の聖と消えたわけで、聖でなくて凡である。代償を需むるの作爲は愛ではない。

キリストは凡でなくて聖である。弟子達がそんな詐言をいうて、師を傷つけてをるのだ。定めし、キリストは天國に在つて、困つた弟子達であると嘆いてをるであらう。

キリスト教の十字章は、決して十字架を表したのではなく、陰(一)陽(1)交情の象(十)を表したものであります。然らば、キリスト教の表章たる十は、陰陽交情のみであつて、活動の象がなく、佛敎の表章たる陰陽交情して、將に活動せんとするに及ばないわけである。宜なる哉、キリスト教の教義は、佛敎に比して、淺薄たるを免れない。

佛、基二敎の表章に比し、泰山敎の表章は洵に、優勝にして萬全なるものであります。敎章はその敎義の表れである。しからば、泰山敎は、佛、基兩敎に比し、その敎義の優勝なることを證するものであります。

嗚呼、偉なる哉 大靈章
嗚呼、聖なる哉 大靈章

泰山敎の本尊

泰山敎の尊崇する大本は、宇宙大靈であります。故に、宇宙大靈は泰山敎の本尊であります。しかしして、宇宙大靈は宇宙に於て、而も空の實在であります。依つて本尊は表徴すべき形象がないので、本敎に於て嚴修する朝夕の行事、又は靈應療法の施術の際に於ても、何等目標とすべきものがなかつた。否、目標を必要としなかつたのであります。然るに、泰山敎出現後、十年を経たる大正十四年に、門人、水戸の菊池玄學翁が「泰山敎の本旨では、何等の目標も要らないが、まだ修業の積まざる自分等は、朝夕の行を修するに、本尊を奉崇したる前に於て爲せば、嚴修の氣分ともなり、また、敎祖の前に在るの心持ちで嚴修する事が出来ますから、是非、許して貰ひたい。そして、本尊を書いて願ひたい。」と、懇請されたので、それも尤もなことと思ひ、この時、始めて「宇宙大靈」として書いたのであります。

菊池翁は、この本尊を掛軸となされ、朝夕の行法嚴修、患者施術等は、本尊の前に於て爲されて居り、そして、修法施術のときの外は、本尊の前に、白き清き幕を垂れて置かれたのであります。

これが、本尊奉崇の發端であります。夫れより各地の門人諸賢が、菊池翁に倣ひ、本尊の奉崇を望まれ、密まるまゝに、私に願書し來つたのであります。

そして、今日となつては、朝夕の行法は本尊の前にて嚴修すること。また、本尊の前にて施術する場合には、術者も患者も、施術

前後に、本尊に對し奉り、合掌禮拜することになつたのであります。(巻頭寫眞第三圖第五圖参照)

御本尊には、大靈の大御力が籠つて居るのであります。そして御本尊からは、御本體又大靈光が顯現するのであります。

餘 録

蚤虱も殺すな

人々は、蚤や虱や蚊などにさされると、直情といつて、殺しますが、さされて苦痛を受けるのは、苦痛を受けるだけの種を播いてあるからです。播かぬ種は生えません。しかるに、それを悟らずに、憎いといふ虚偽精神を出して、それを殺す。これ残酷といふ罪惡の種を新しく蒔くのです。さうすると、その蒔いた種は、また必ず生えて來るのであります。ですから、皆さん方は、それ等のものを決して殺してはなりません。靈力充實して居れば、蚤も虱もつかず、蚊も寄りつかなくなるものです。

悟入後の罪惡は觀面に現ける

それから、一度悟入してからの罪惡は、觀面に凝結して心身の上に、苦痛となつて現はれて來るものです。悟入されたる貴下方は、少しでも虚偽精神を働かせぬやうにならねばなりません。悟入前に於ては、曇りたる鏡の如きものであるから、曇りたる鏡が發生しても、一寸氣がつかない。即ち、常に吾儕の裡に在るのだから、少し位の苦痛が増しても左程に感じない。悟入しては、明鏡の如き

であるから、少しの暗影も直映つて見える。即ち、少しの虚偽精神の働きも、直深潔な苦痛となつて現はれて來るものであります。

X X X X X X X

外講靈光認識

本講に於て、お話しする機會がなかつたので、茲で申述べて置きます。靈は見んとすれど色、即ち形なき實在であるとは説いてお話ししたところでありますが、これが發動たる靈力は肉眼で認むることが出来るのであります。靈力を發現して、少し漸明かい處で凝視しますと、良くこれを認むることが出来ます。即ち、煙の如くまた陽炎の如くに顯はれて出ます。

これ御覽なさい。私の指頭や手掌からもまた、頸部からも、このやうに發顯いたします。これは常に指頭や手掌や頸部から斗りでなく、頭からも足からも腹からも、實は全身から發顯するのであります。私はまだ今日修行が積みませぬが、修行が積むにつれて、この靈力は益々濃厚に顯はれ、遂には光となつて顯はるのであります。(教祖の靈光寫眞参照)

如來の佛光

佛教で、如來佛(大靈)を具體化した、佛像といふのを寺院に本尊として安置しておきますが、あの佛像には佛光と稱して、頸部より上に向つて圓形を呈したる金色のものを附てありますが、あれは、即ち靈光であります。現代、僧侶の多くは、御承知の通り邪念邪氣の生活、泰山教でいふところの虚偽精神の生活を爲して居り、隨つて靈力を体得せず、自身、靈力の體験なきが故に靈光の存在を知らず等がなく、彼の如來佛は殊更に愚民等の有難味を喚起せんが爲に假設したもので、決して現實のものではないと思ふて居

る。これは海に罪悪といはねばならぬ、佛教は佛光を發現して衆生を濟度するを本願とする。然るに、佛教徒が佛光の存在を知らず、これを否認して居るの現状である。斯くの如くして焉んぞ衆生を濟度し、佛光に浴せしむることが出来ませうか。實に愚にも堪へないことでもあります。

佛教の數祖釋迦は、定めし慈眼を現代佛教徒の上に放ち、目悲しんで居らるゝこと、思ひます。

○僧とは何ぞや

尚、乍序、僧といふことについてお話しませう。僧とは佛法の法衣を纏ふた人間をいふのではなく、僧と申すのは、佛の實徳を悟り、佛我となり、佛力を體得體現し、その作爲たるや、一切衆生の拔苦與樂を行すところの者をいふのであります。乃ち、曾て凡人であつたものが、佛光に浴して、大悟大徹、佛の本體となり、慈眼光を發現したる者を僧と申すのであります。現時、わが國に於ける佛門の僧と名のつくもの、實に拾萬の多數あるが、その中に、佛我に悟入し、佛光を體現するの眞僧契して衆人あるであらうか。佛力(靈力)を體得し、佛光(靈光)を體現し能はざるところの者は、僧ではないのであります。假令、法衣を身に着けてゐても、中に凡我を包んで居るのは、僧ではなく凡夫であります。凡夫が身に法衣を纏ふて僧を契ひ、世を欺瞞するは、罪惡の最も甚だしい所爲であります。

○菩薩の解

佛教に菩薩といふのがありますが、それは、如來佛……如去如來ともいふ……泰山教の宇宙大靈……の妙用に對する名稱であります。

す。彼の觀世音菩薩(觀自在とも云ふ)とか、虚空藏菩薩とか申すのは、即ちそれでありませう。また、佛教で現身佛と申すのがあります。現身佛とは、大悟大覺を得、佛力を體得體現して衆生濟度に盡くすところの聖者をいふのであります。この現身佛がまた菩薩なのであります。彼の觀世音菩薩や普賢菩薩の如きは即ちそれなのであります。

佛教の菩薩は、その現身佛と法身佛とを問はず、衆生濟度にはたらく、宇宙大靈力の妙用を申すのであつて、彼の觀世音とか虚空藏とかいふ、所謂偶像そのものが菩薩ではないのであります。凡夫等は菩薩の本體を悟らず、偶像そのものを菩薩と思惟し、これを崇拜し、且又、私慾を貪らむが爲に祈願するのであります。海にその愚、慨然に堪えないのであります。

菩薩とは、衆生濟度のために活動する、宇宙大靈力の玄妙作用を申すのであります。故に、大靈力を體得體現し、衆生濟度の爲に妙用するところのものが菩薩であります。皆さん方は、今や、宇宙大靈力を體得體現し、衆生濟度のために活動なさるからには、既に、菩薩となられたのであります。皆さん方の中には、從來、偶像を菩薩と誤信し、禮拜崇敬し且祈願等をなされた方もありますが、今や、諸人の禮拜崇敬の靈體となられ、眞實の菩薩の位に上られたので、凡夫の位置は全く顛倒したのであります。

佛教で申す、この菩薩といふ階級は、それを維持するに難かしいのであります。怠れば、凡夫界より畜生界までも墮ち、益々大靈の道に隔進すれば、天上界に上ることが出来ず、即ち全然、宇宙大靈の道となるのであります。

皆さん方は、眞因あつて、泰山教門に入られ、至上至尊の大靈力を體得せられ、諸人が崇敬求救の菩薩となられたのでありますから、夢にも下界に墮落するの愚を爲さず、常に宇宙の大法則に準據し、精進以て天上界に昇進せられむことを御注意いたすと共に、秘の衷心より切々念願するところであることを申し上げて、茲に初門の講授を終ることにいたします。

泰山教 初門講授 終

本書の讀者に誥ぐ

本講授録によつて、大靈力を御體得且つ顯現なされた賢者は、この初門より更に奥門へ直入せられ、泰山教學親傳奧書によつて、高等研究科に於て、親講親傳さるゝ、泰山教學の蘊奧、靈法の極致たる至立至妙の諸法術を修得體現され、益々廣く大きく且つ無限に、自他の圓滿幸福を増進せられんことを、衷心以てお勧めいたします。

教 學 部

泰山教學々々祖 大日本哲學院長 加藤泰山 親授

聖 泰山教學親傳奧書

非 賣 品

此際靈光會員にして本院維持費中へ金貳拾圓以上を淨納
なざる御仁に特別を以て頒授いたします………

此奧傳書の内容を茲に撮記するわけにはゆかぬが、本書は教訓が、講授會高等科に於て御授される、泰山教學の蘊奧と高等科門生に觀傳さるゝ左記大秘法術を記録せし聖典であります。(泰山教學靈力靈驗録、靈光誌等には概要の説明があります。)
本聖典は、教祖親から門生にのみ授けられ、門外不出のものであります。

- 泰山教學の蘊奧
- 加藤式靈學療法の極致
- 一座集合治療大秘法
- 遠隔集合治療大秘法
- 自他同時治療秘法
- 直接遠隔同時治療秘法
- 活尊靈符謹作大秘法
- 治病靈符、除災靈符
- 開運出世靈符、商賣繁昌靈符
- 農作物增收靈符、養蠶完育靈符
- 試驗及第靈符
- 泰山教學親傳奧書により活尊靈符を謹作されたる賢者にして、その活尊靈符を本院へ謹送さるれば、教祖親しくこれを靈驗し、正しく靈體と確認せば特に高等科卒業證書を授與す。
- 夫婦和樂靈符、安産靈符
- 至立至妙活尊靈符による遠隔集合治療大秘法
- 自己及全家族の諸能力増進並に病癰一齊治療大秘法
- 糸紐靈感療法
- 養蠶完育秘法
- 農産物增收秘法
- 諸能力増進秘法
- 運命開拓秘法
- 大自由自在秘法
- 無病強健法
- 安産の秘法
- 靈風術
- 親子圓融秘法
- 夫婦和合秘法
- 諸事必勝秘法
- 諸願成就秘法
- 農産物增收秘法
- 諸能力増進秘法
- 運命開拓秘法
- 大自由自在秘法
- 無病強健法
- 安産の秘法
- 靈風術
- 親子圓融秘法
- 夫婦和合秘法
- 諸事必勝秘法
- 諸願成就秘法
- 糸紐、木竹、ゴム靈感法
- 諸事業成功秘法
- 商賣繁榮秘法
- 貸金回收秘法
- 災厄除滅秘法
- 朝夕の諸行事
- 献供物の行事
- 食事の行事
- 太陽に對する行事
- 月に對する行事

謹告

一、本尊頒授御望みの方は申出られたし。

泰山教御本尊頒授規程

教祖親筆

紙本 金參圓也 (大小共に同じ、申込みの
絹本 金五圓也 際何れとも申添えの事)
統本 金六圓也

表装は貴方にて可爲成事、
若し貴方に適良の表装帥無之節は御依頼に依り本院にて特に謹製せしむるも
表装代及び荷造送料下表の通り
右淨納者に特に頒授す。但し門人及
び靈光會員以外の者には頒授せず。

泰山教廳庶務課

寸法	緞子表装	紙表装
三尺三寸上り	壹圓五拾錢	金五拾錢
三尺八寸上り	參圓五拾錢	壹圓貳拾錢
四尺五寸上り	參圓五拾錢	壹圓貳拾錢
六尺上り	四圓五拾錢	壹圓五拾錢

荷造及送料約五拾錢位

一、泰山教制服(修法聖衣)頒授御望みの方は申し出られたし。この
聖衣は、尊嚴と慈悲とを表象したるものであります。
本綿製(紋代裁縫賃送料共實費、約金參圓)御婦人用は紋一箇故、右代
金より約四拾錢引けます。
御依頼書には、身丈、袖丈寸法お忘れなく御書き添えのこと。セル又は
絹物なれば見積書差上げます。

泰山教廳庶務課

昭和七年十一月十日 納本
昭和七年十一月十五日 發行
昭和十二年三月廿日 再版

泰山教學講授録下編(奥付)非賣本

著者 加藤 泰山
福島縣若松市馬場上一之町六番地
發行者 加藤 晃
新潟縣三條市一之木戸三五八番地
印刷者 小林 資
新潟縣三條市一之木戸三五八番地
印刷所 小林印刷所



不許複製
禁轉載

發行所 會津若松市馬場上一之町六番地
大日本哲學院教學部
振替口座東京七三九二七番

372
244

終